

Mero Sathi Project



《Mero Sathi Project とは》

(https://www.facebook.com/Mero-Sathi-Project-1430027903970025/?ref=tn_tnmn)

2015年4月25日ネパールを大地震が襲った。死者は8千人、負傷者は2万人を超えている。ネパール語で「私の友達」を意味する Mero Sathi (メロ・サティ) を合言葉に、復興の一助となることを目指して日本の大学生が主体となり立ち上げた、ネパールや東南アジア地域の大学生と協力して取り組むプロジェクトである。AAEE 一般社団法人アジア教育交流研究機構は活動を全面的にサポートしている。

(AAEE, アジア教育交流研究機構ホームページ <http://aaee.jp/>)



《これまでの主な活動》

1. 地震当日にネパールに応援メッセージ配信

地震発生1時間後に10か国のAAEE会員に声がけし、その日の内に応援パネルをFace Bookで送信。応援パネルは250万人の人々に届いた。また、ビデオメッセージも送り励ました。

<https://www.facebook.com/AsiaAssociationOfEducationExchange/photos/a.356676247715437.72822.356410997741962/828361410546916/?type=3&theater>

私たちは震災の翌日から Web 上での呼びかけを開始。多くの方の気持ちを一つの気持ちとしてネパールに届けることが出来たことや、世界中に発信できたことは支援始めとして良かったと思う。その後の支援活動も、このいいスタートがあったからだと考えている。今でもネパールの方たちを救いたいという気持ちは変わりません。今後も現地の方の生活が少しでも良くなるよう、継続的に支援活動を続けていきたい。

(青嶋一輝)

2. 「ネパール緊急支援プロジェクト」を開催



地震発生からわずか10日後の5月5日に、JICA地球ひろばにて「ネパール緊急支援イベント」を開催。150名以上の方にご来場いただき、ネパールの現状や、支援の必要性を訴えかけた。

本イベントでは外務省や JICA にご後援をいただき、NHK、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、日刊スポーツなど多くのメディアにて紹介していただいた。

詳しくはこちら→<http://aeee.jp/publicity/>

5月5日の支援イベントに参加して、世間のネパールへの関心の低さを感じた。私もそうだが、地震が起きたからネパールのことを知ったという人も多いと思う。このイベントを開催し、150人以上の方にご来場いただいたこと、そして多くのメディアに取り上げていただいたことで、皆さんに関心をもってもらえたような気がしている。また、関先生のネパールに対する熱い思いを聞いてこれからも支援活動を続けていかなければいけないと思った。(中野優子)

3. ネパール応援 Mero Sathi 動画撮影プロジェクト

物質的支援だけではなく、被災した方々を勇気づけ、心のサポートを行うことを目的としてアジア各国の学生に応援動画撮影を募り、ネパールに発信。参加国は日本、韓国、台湾、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、カンボジア、ラオス、ドイツ。

4. 募金活動

東京経済大学、上智大学、早稲田大学、JR駅前などで一ヶ月に亘り募金活動を行う。200円以上の募金をしてくださった方には学生オリジナルデザインの Mero Sathi リストバンドを差し上げた。Mero Sathi Project 全体として70万円を超える支援金を募ることに成功。



個人的な理由でネパール研修に参加できなかった私は、研修に参加できない分、募金活動を誰よりも頑張った。最初は責任感を強く感じ、募金で集まったお金をどうやってネパールの被災者のもとへ届けるのか悩んだ。きちんと届けなければいけないという責任感を強く持ちながら募金活動を行った。また、募金を通してどうやったらより多くの方に募金をしてもらえるのか、相手に伝わるのかなど、募金をする際には様々な工夫が必要だと感じた。(エディ)

5. 大学生協での Mero Sathi リストバンド販売

売上金のすべてをネパール支援に利用。



今回、Mero Sathi バンドのデザインを担当させていただきました。色々なカラーを交えて作成したこのバンドは、ネパールの方たちへの思いや気持ちを想像し、色に例えて作成。明るい色を使ったのにはもう一つ理由がある。それは、今後ネパールの方たちに明るい未来が訪れることを願っているということだ。想像していたよりも多くの方にバンドが届きうれしく思う。これからも販売を続けていきたい。(山岡美奈子)

6. 定例勉強会



ネパールやカンボジアをはじめ開発途上国の実態や多文化交流に関わる様々な事項について、学生メンバーが自主勉強会を実施中。

7. 被災地の状況報告

地震直後からネパール人メンバーが行っている被災地支援のレポートを英語・日本語にて報告中。

8. 被災地支援+学生交流プログラム

日本、ネパール両国の参加者が共にネパールの被災地に滞在し、支援活動を行うと同時にネパール・日本の諸問題について語り合い、友情を深める2週間のプロジェクトを8月、9月、2月に開催。日本人学生、日本在住の留学生（ベトナム、マレーシア、香港、台湾）合計30名の大学生、高校生（上智大学、東京経済大学、青森公立大学、近畿大学、東京大学、早稲田大学、早稲田大学所属）が現地を訪れ、同数の現地大学生と共に活動。現地では被災地の人々との協働活動の難しさを目の当たりにしただけでなく、不安定な政治情勢によるストライキの頻発も重なり支援活動は困難を極めたが、現地の学生と本気で議論しながら行った取組は大変貴重である。

・8月プログラム

リーダー 関愛生(上智大学総合グローバル学部)

<http://aaee.jp/activities/2015/08/000175.html>

・9月プログラム

リーダー 鳥井誠(東京経済大学現代法学部)

<http://aaee.jp/activities/2015/09/000176.html>

動画：<http://aaee.jp/activities/2015/12/000223.html>

(東京経済大学 石井侑登制作)

・2月プログラム

リーダー 吉川夕葉(上智大学総合グローバル学部)

動画：<http://aaee.jp/activities/2016/05/000240.html>

(上智大学 山岡大地制作)

一般社団法人 アジア教育交流研究機構
AAEEネパールの大学生と共に考える
ネパール復興支援プロジェクト

MERO SATHI PROJECT

募集人数：
日本の大学生10名 満員御礼!
ネパールの大学生10名

私の友達

選考中

2015
日程

- 8月14日 カトマンズ着
- 8月15日 カトマンズ学生と市内視察
- 8月16日 カトマンズの大学にて講義受講
(16日以降カトマンズの学生が同行、協働予定)
- 8月17日 被災地に移動(ホームステイ)
- 8月18日 終日被災地にて活動(ホームステイ)
- 8月19日 終日被災地にて活動(ホームステイ)
- 8月20日 被災地からボカラに移動
- 8月21日 ボカラの学生と交流
- 8月22日 ボカラNGO視察
- 8月23日 カトマンズに移動
- 8月24日 大学での報告会、NGO視察
- 8月25日 プログラム終了

ご質問・お問い合わせ：e-mail: seki@aaee.jp <http://aaee.jp/>

AAEE学生交流プロジェクト
2015年 交流日程

東京経済大学 関愛生ゼミナール 一般社団法人 アジア教育交流研究機構

2015年
交流日程

- 9.5 Kathmandu School of Law
講義受講、交流学生との対話
- 9.6 カトマンズ近郊からバグルン難タンセン市に移動
- 9.7 タンセン市周辺にて交流、マインから移動
- 9.8 カトマンズ近郊の被災地の視察
- 9.9 カトマンズ近郊の被災地の視察
- 9.10 マインからボカラに移動
- 9.11 現地NGO訪問
- 9.12 カトマンズに移動
- 9.13 タイ・バンコクへ移動
- 9.14 ラムカムヘン大学にて交流
- 9.15 ラムカムヘン大学学生と市内観光

ご質問・お問い合わせ：e-mail: seki@aaee.jp <http://aaee.jp/>

一般社団法人 アジア教育交流研究機構
AAEEネパールの大学生と共に考える
ネパール復興支援プロジェクト

MERO SATHI PROJECT

募集人数：
日本の大学生10名 満員御礼!
ネパールの大学生10名

私の友達

選考中

2016
日程

- 2月13日 ネパール学生メンバー合流
- 2月14日 被災地へ移動、到着後支援活動
- 2月15日 終日支援活動
- 2月16日～19日 ヒマラヤの村で
Mero Sathi学生交流プロジェクト
- 2月20日 ボカラのNGO学校の生徒との交流会、
孤児院視察
- 2月21日 カトマンズに移動
- 2月22日～23日 カトマンズのNGO視察、
メディア対応、プログラム総括

ご質問・お問い合わせ：e-mail: seki@aaee.jp <http://aaee.jp/>

Mero Sathi Project

August



はじめに

8月のスタディーツアーについて

私たちは、4月25日にネパールで大地震が発生してから Mero Sathi Project を立ち上げ、学生が主体となった支援活動を一貫して行ってきた。5月5日に開催したチャリティーイベントでは、ゴールデンウィーク中にもかかわらず150名以上の方々が集まり、数多くのメディアにも取り上げていただいた。その後も街頭募金やチャリティーバンドの販売など様々な活動を行っていく中で、50名を超えるたくさんの学生に活動に携わってもらった。

8月に私たちが行ったスタディーツアーは、これらの活動に携わり、かつ自分の目でネパールの現状を見てみたいという学生が中心となり企画したものだ。ギリギリのスケジュールではあったが、上智大学を中心に、早稲田大学、成蹊大学、青森県立大学の学生9名が8月にネパールに渡航し、スタディーツアーを行った。このスタディーツアーの目的は、私たちがプロジェクト発足より行ってきた活動で集まった支援金をもとに企画した独自の教育

支援プロジェクトを実行することだった。学生が主体となり行う支援活動は果たしてうまくいくのか、スタディーツアー開始まで不安の募る毎日ではあったが、毎週 10 時間近くにも及ぶミーティングを重ね、ネパールの現状についてや途上国における支援活動の基本を学んだ。当スタディーツアーには従来の一般的なスタディーツアーと違う大きな特徴があった。それは、国際交流の要素を重視している点だ。今回スタディーツアーを行うにあたって、日本人参加者のみならず、ネパールの現地大学生も日本人と同名程度募集した。ネパールでは地震が起きる以前から多くの問題を抱えていたが、それらの問題の解決を担う若者が共に話し合い、解決に向けて努力することが重要であると考えたからだ。また、支援プロジェクトを行うにあたって日本人のみによる支援ではなく、現地の人々の視点を取り入れることで継続的な支援活動を行えるのではないかと考えたためだ。当報告書では、ネパールに行ったメンバーにより、①震災状況、②支援プロジェクト、③学生交流、④ネパールの人々、という 4 つのテーマに沿って私たちの現地での活動を報告したい。

学生リーダー 関愛生

《メンバー紹介》

✈ ✈ ✈ From **Japan** ✈ ✈ ✈



関愛生 (Yoshiki Seki)

- ・ Mero Sathi Project 学生リーダー
- ・ 上智大学総合グローバル学部 1 年
- ・ アツさの塊
- ・ 頼れるリーダー

阿部充紘 (Mitsuhiro Abe)

- ・ サブリーダー
- ・ 上智大学総合グローバル学部 1 年
- ・ 愛生リーダーの右腕
- ・ ダンサー





金子暁 (Aki Kaneko)

- ・サブリーダー
- ・早稲田大学政治経済学部1年
- ・抜け目がないしっかり者
- ・頭の回転が速い

山田堅也 (Kenya Yamada)

- ・青森公立大学経営経済学部1年
- ・コメディアン



松下菜夏 (Nanatsu Matsushita)

- ・上智大学総合グローバル学部1年
- ・会議に花を添える明るさを持つ
- ・社交的



柴田はるか (Haruka Shibata)

- ・上智大学総合グローバル学部1年
- ・仕事が早い
- ・しっかり者で働き者





安蔵啓 (Hiromu Anzoh)

- ・成蹊大学法学部1年
- ・いい意味で変人
- ・縁の下の力持ち

越替健登 (Kento Koshigae)

- ・上智大学総合グローバル学部1年
- ・ここぞというときに力を発揮!!
- ・気が利く



佐藤ゆうと (Yuto Sato)

- ・上智大学総合グローバル学部1年
- ・中身も外見もスマート
- ・情緒豊かな青年

榎本花 (Hana Enomoto)

- ・癒し系
- ・みんなのお母さんの存在
- ・明るい!!



✈ ✈ ✈ From **Nepal** ✈ ✈ ✈



イネーシャ(Inesha Bhattarai)

- みんなの妹分
- いつも明るく歌うのが好き

プシュパ(Pushpa Gurung)

- 9月プロジェクトにも参加
- 明るくてしっかり者
- 笑顔がキュート



プラティック(Pratik Neupane)

- シャイ
- センスがいい
- 落ち着いている



ショツダ(Sharadha Bhatta)

- 小柄だけどパワフル
- オシャレ





サティス(Satiz Battarai)

- ・根はまじめ
- ・頭がいい
- ・みんなのムードメーカー

シュリア(Sriya Shrestha)

- ・面倒見がいい
- ・気が利く



ディプティ(Deepti Bhattarai)

- ・人見知り
- ・チャームングで頭がいい

ラケケシュ(Prakash Neupane)

- ・ Student leader
- ・頼れるお兄さんの存在
- ・歌がうまい





シャラッド(Sharad Sharma)

- Student coordinator
- おしゃべり上手
- 皆を引っ張ってくれる

シテイ(Kshitiz Bhattarai)

- Student leader
- パワフル
- スポーツが得意!!



① 被災状況

担当者:山田堅也、金子暁、安蔵啓

被災地

2015年4月25日11時56分(現地時間)、ネパール中北部を震源域とするマグニチュード(Mw)7.8の地震が発生した。Kathmandu(カトマンズ市)および近郊における歴史的建物および一部の住宅に大きな被害が出ているとともに、Sindhupal Chok(シン ドゥパルチヨーク郡)をはじめとする北部山間地での被災率が際立って高いことが特徴。

状況

・ネパール警察の発表によると地震による犠牲者の分布は、総数は8,532人、負傷者は19,039人以上(6月2日時点)で、特に首都Kathmanduから北東に位置するSindhupal Chok地区の被害が甚大で死者3,419人、負傷者は1,403人(6月2日時点)で現在も増加している。

実務的な視点

・実際にはカトマンズでは観光するためだけなら、何の問題もなかった。その点では私たちがネパールに行く前に感じていた地震の被害に対するイメージは今まで間違っていたことに気づいた。実際には少し首都のカトマンズから離れると、民家が崩壊している所もあれば、傾いている所もあった。しかし現地の人々は建て直しや耐震補強をするお金がないため、角材で支柱を立てて支えるしかないと述べていた。ネパールのシンボルである仏教寺院にあるストゥーパの上の部分も被害を受けており、こちらも木で補強するので精一杯であった。

② 支援活動について

担当者：佐藤ゆうと、越替健登

今回の支援について

全体的なテーマとして我々が上げていたのは、持続可能な支援という点だった。当初の予定はニワトリ小屋であったのだが、国の大半が山岳地域であるネパールではその標高による温度の低さにより生育が難しく、ヤギに変更された。これらがどの点において持続可能なのかといえば、ヤギを育て、そこからチーズなどを生産し、生産物を販売することによって、現地に金銭的収入が入る。その利益で現地の教科書などの教育関係の品を購買し、学校を立てる。するとそれは、ただ金銭的援助をする従来の支援とは異なった、現地の社会にとって持続可能な支援となるのではないかと考えたからだ。ただ、直前でプランは再度変更となり、学校とヤギ小屋を同時に作るということになった。というのも、当初の予定では、ヤギ小屋を作る代わりに学校を作る、と約束していたのだが、現場が一刻も早く学校を欲したからだそう。我々はやむなくその最終プランを承諾し、現場へと向かった。

しかし現場について我々が目にしたのは、地面に申し訳程度に空いていた幾つかの穴と散らばった材木、そしてそこに佇む村人たちの姿であった。完成しているはずのヤギ小屋はそこにはなかった。さらに驚くべきことに、同時に作っていたはずの学校は「完成」していた。村人たちが言うには、学校に人員を使ってしまったため、ヤギ小屋を作れなかったそう。しかし当然のごとく、約束をさせた側の我々には怒りと困惑があった。その後行われたメンバーによる話し合いの結果、プロジェクトは頓挫した。実際のところ今回、支援は「何もできなかった」のである。

その他には、ネパールの二つの学校(ポカラの小学校、シックレス村の小学校)を訪れ、日本から持って行った支援物資(鉛筆、ペン、縄跳び等)を届けた。また、物資の受け渡しのみならず、日本のダンスと歌を使って生徒たちと交流をした。私たちは被災地の小学生を元気づけることが目的であったが、子供たちの無邪気な笑顔に私たちが救われた。

○支援の難しさについて

一般論ではあるが、そもそも言語の異なる相手との対話において意思の統一を図ることは難しい。今回も同様、現地と意志の統一を図ることが難しかった。それは単なる文化的差異だけではなく、時差といった時間の問題があり、国内での準備期間を難航させた。そして到着した現地では今度は言語の壁に直面した。

また、例の一件の後にプロジェクトの出直しを決めることになった、メンバーによる話し合いの中では、需要と供給の一致が問題視された。我々を呆然とさせることになった彼らのストライキ的行動は本当に彼らのせいであったのか。約束が破られるのは必然だったとは言えないだろうか。自分たちにも何かしらの問題点があったとは言えないだろうか。現地がどういった状況なのか、ニーズはなんであるかなどもっと詳細に把握できていれば、状況は変わったかもしれない。事後ではあるが、あの村での一件があってから、何か他にもできる

ことがあったのではないか、もしくはまだあるのではないだろうか、という無力感が我々を悩ませた。個人的見解ではあるが、そもそも今回の支援を誰に届けたかったのかがはっきりしていない。村か。それは本当に全体を指し示しているのか。自分たちは結局、支援という名の下にかき乱しただけではないのか。実情がはっきりしていないため、それも結局のところ真相は闇の中である。

まとめると、支援の難しさとはこういった点だ。異なる文化、時間、言語を持つ相手と協力して何かを成し遂げようとするのはとても難しい。しかし、その難しさを痛感したからこそ、得るものも多かった。

③ 学生交流について

担当者:柴田はるか、関愛生



渡航以前から、私たちはネパールの学生と連絡を取り合っていた。日本から何を持っていくべきなのかなど、支援内容に関する打ち合わせだけでなく、渡航準備に必要な情報交換も行っていた。

しかし、いざネパールを訪れ、現地の学生と対面すると、緊張や語学の壁から、うまくコミュニケーションをとることができなかった。日本人は日本人同士、ネパール人はネパール人同士で固まり、お互いに気まずい雰囲気が漂っていた。しかし、日数を重ね、ともに活動する中で、徐々に会話の数が増えていった。とくにお互いにうちとけるきっかけをつくった

のは、ダンスだった。夜、ネパールの曲と日本の曲を交互に流しながら踊りあかすことで、少しずつ両国の学生の距離が近づいて行った。彼らは常に、ネパールに不慣れな私たちをサポートしてくれ、私たちも彼らに日本のことなどを語った。

そして最終日。メッセージを送りあい、互いに涙をこぼし別れを惜しみあった。私たちは今回の交流プログラムを通して多くのことを学んだ。先進国が途上国の人々に知恵を授けるという従来の概念とは全く異なり、私たちは互いに学びあい、教えあった。このような対等な関係を築き上げることこそが、今後の両国の発展に大きく寄与するのだと強く感じた。そのためにも今後もこのような国境を超えた学生交流を推進していく必要があるのではないだろうか。

④ ネパールの人々について

担当者:松下菜夏、阿部充紘

ネパールは開発途上国であり、4月に地震もあったことから、かわいそう、貧しいといったイメージを持っていた部分があった。しかし、実際ネパールに行ってみると、日本での生活にはない、ゆったりとした時間や人と人の強いつながりがあり、私達の日本での普段の生活とはかけ離れたものであった。その中で自分自身について考えるきっかけや、私たちが日本での生活では気づけなかったことや新たに学ぶことが多くあった。ネパールの山奥の村はまるで異世界だった。明るい街灯や車の騒音、町の騒がしさなどは何もなく、エベレストをはじめとする圧倒的スケールの自然だけがある。自分の普段の生活や悩みなどどうで



もよくなった。そして、ネパールでは集合時間の1時間後に集合し5分歩くといって30分歩く、というようなことが当たり前であった。

また、ネパール人は日本では信じられないくらいフレンドリーで温かい人たちばかりだ。私たちが「ナマステ」と挨拶すると現地メンバー、村の人、フルーツ売りのおじさん、街の人。ネパールで出逢ったすべての人が笑顔で返してくれる。日本人は会話をしたり、感謝の気持ちを伝える際にすぐに便利な通信機器に頼ってしまい、人と人との関係が薄くなっている。そういった心が孤独である人が多い日本では感じられない温かさがネパールにはあった。

以上のように、ネパールでは自分の内面に語りかけてくるものが多く、我々よりも人間味のようなものがあるように思う。これは何故なのだろうか。一つは開発途上国であるということが関係しているように思う。開発途上国と日本のような国では「便利さ」、「経済発展」や「選択の多さ」の違いが決定的な違いを生み出している。日本では時間に追われ多くのモノに囲まれ物欲や取るに足らない悩みばかりが増えフェイストゥフェイスの対話が増えるにつれ遠くなることを感じた。これまで自分たちの「当たり前」が問に変わり、ネパールに対するイメージ変わった。それと同時に私たちが日本の社会の中でどう本当の意味での豊かな人生を送れるのかということも考えさせられた。

以上、4つの項目を9名のメンバーからの報告とする。

メンバーが今後どのような道に進んでいくかは分からないが、ネパールで学んだことをそれぞれが自分の道で活かしてほしいと考えている。

また、スタディーツアーは終わったが私たちのネパールへの思いは変わらない。今後も自分たちに出来ることを常に考え、ネパールでお世話になった多くの方々のためにも **Action** を起こしていきたいという決意のもと、報告を終えさせていただきたい。



Mero Sathi Project September



私たちは9月に Mero Sathi Project September としてネパールとタイに行き活動を行った。私たち東京経済大学関昭典ゼミナールにとってネパールは思い入れのある国の一つで、過去に2度研修でも訪れ、現地では様々な支援活動や児童教育のボランティアなどを行ってきた。今回の研修では実際に被災地を訪れての支援活動はできなかったが、この研修を通して学んだことを各自報告する。

9月プロジェクトリーダー 鳥井誠

《研修日程》

2015年9月3日～9月16日

タイ	9月3日	出発 成田→バンコク
ネパール	9月4日	バンコク→カトマンズ
	9月5日	カトマンズ→パルパ県タンセン
	9月6日	タンセン市内の学校訪問 マイダン村へ移動
	9月7日	ネパールー日本交流祭準備
	9月8日	ネパールー日本交流祭
	9月9日	マイダン村→ポカラへ移動
	9月10日	午前 支援による学校での交流 午後 孤児院での交流 夜 ネパール学生とのお別れ会
	9月11日	ポカラ→カトマンズへ移動
	9月12日	カトマンズで活動
	9月13日	Kathmandu School of Law にてネパールの諸問題に関する講義受講 (Yubaraj Sangroula 教授。元法務長官)。 カトマンズ→バンコクへ移動
タイ	9月14日	ラムカムヘン大学にて公式交流プログラム
	9月15日	ラムカムヘン大学の学生と市内観光
	9月16日	バンコク→羽田 帰国

《メンバー紹介》

✈✈✈ From **Nepal** ✈✈✈



プシュパ (Pushpa Gurung)

- ・本スタディスアワーのオーガナイザー
- ・ポカラ在住・主言語はグルーン語。
- ・シャムロックスクールで学生教員を務めたこともあるしっかり者

サティス (Satiz Bhattarai)

- ・ネパールリーダー
- ・真面目で信頼できる
- ・物知りで世話好きな一面も
- ・頼れるお兄さんの存在



ジョティー (Jyoti Gurung)

- ・可愛くて笑顔がステキ
- ・優しくて前向きな女の子
- ・世話好きでとっても親切!!
- ・みんなから愛される妹キャラ

シュシラ (Sushira Sharma)

- ・おしゃべり大好き!!
- ・いつも明るく面白い
- ・思いやりがあって、気遣いができる優しいお姉さんの存在



プジャ (Puza Gurung)

- ・プシュパの妹
- ・ロマンチックで笑顔がかわいい
- ・一緒にいると青春を感じられる
- ・シャイだけどダンスが得意

クリシュナ (Krishna Adhikari)

- ・好奇心旺盛でソーラン節や日本語に興味津々!!
- ・他人を思いやる心の持ち主
- ・実はスーパーエリート!?



ラケシュ (Rakesh Kushwaha)

- ・ネパールメンバーの中で一番明るく、おしゃべり大好き!!
- ・周りの人を笑わせるのが得意だけど、人前でしゃべるのはちょっと苦手...

ミラン (Milan Gurung)

- ・いつも笑顔でフレンドリー
- ・真面目でみんなのムードメーカー
- ・ギター演奏やダンス指導では中心になって大いに盛り上げてくれた!!



ノラーズ (Nauraj Gurung)

- ・大人しいけれどとっても優しい
- ・ミランと同じくギターが趣味
- ・将来の話や学校の話をもっと真剣に語りあえる真面目な青年

サンジェ (Sanjay Dura)

- ・歌うことが大好き♪
- ・将来の夢は歌手!?
- ・シャイだけど、話すとともに面白い
- ・思いやりがあり、笑顔が素敵な優しい青年



✈ ✈ ✈ From Japan ✈ ✈ ✈



関昭典先生 (Akinori Seki)

- ・東京経済大学准教授
- ・AAEE 代表理事を務める
- ・ポカラ在住経験あり
- ・ネパールに対する思いは人一倍強い!!

関愛生 (Yoshiki Seki)

- ・8月に引き続き9月も参加
- ・ネパール語も話せる
- ・最年少だけどとっても頼りになる
- ・みんなから慕われるスーパー少年



鳥井誠 (Makoto Torii)

- ・日本リーダー
- ・口数は少ないけどしっかり者
- ・紳士な対応ができる
- ・控えめだけどいざとなったら本領発揮!?

田中身佳 (Mika Tanaka)

- ・日本サブリーダー
- ・過去2回ほどベトナム研修にも参加
- ・しっかり者で抜けがなく、皆からは「ママ」と呼ばれ慕われている





王啓明(Wong Kai Ming)

- ・香港出身
- ・日本サブリーダー
- ・人生経験が豊富で頼りになる、みんなのパパ的存在

比嘉海斗(Kaito Higa)

- ・過去にベトナム研修にも参加経験あり
- ・みんなに優しい
- ・思いやりの心は人一倍!!
- ・忠浩と同じく盛り上げ役



石井侑登(Yuto Ishii)

- ・動画担当
- ・フレンドリーで誰とでもうまくやっけてける
- ・誰からも愛されるキャラ

サレム(Salem Nguyen)

- ・ベトナム出身
- ・楽しい、面白いことが大好き
- ・美味しいものには目がない
- ・英語が得意!!





渡辺佑樹(Yuki Watanabe)

- ・過去にベトナム研修にも参加
- ・冷静に判断ができる
- ・頼れるお兄さんの存在
- ・現地人に間違われやすい!?

高山忠浩(Tadahiro Takayama)

- ・盛り上げ担当
- ・何でも笑いに変えちゃうエンターテインメント性抜群の持ち主
- ・誰よりも笑顔を大切にしている



レミ (Wang Xinxin)

- ・中国出身
- ・ポスター&デザイン担当
- ・センス抜群
- ・しっかり者で頼りになるお姉さんの存在



《報告書》

研修を通して学んだ

自分の目で見て、受け入れるということ

鳥井 誠

期待と不安を抱いたまま 2 週間のゼミ研修が始まった。私にとってこの研修が 2 回目の海外渡航だ。初めてのアジア、慣れない海外旅行、そしてゼミ長であるという責任の重さから、研修中も不安でいっぱいだった。ネパールとタイについてはゼミの授業中に何度か学んでいたものの、実際に訪れてみると、自分が想像していた以上に貧しい国だと感じた。特にネパールではきちんと整備されていない道路やゴミが散乱していて衛生的に問題がありそうな場所がたくさん見られた。また学校に通えていないだろうと思われる子供たちも多く見られ、教育の面での問題も垣間見られた。

そんなネパールで私たちはマイダン村という小さな村で 3 日間ホームステイをした。マイダン村へは首都のカトマンズから約 8 時間かけてジープで向かった。慣れない長い移動でとても疲れたが、村に到着すると間もなく村人たちが私たちを盛大に出迎えてくれたので疲れも一気に吹っ飛んだ。言葉は通じないが、村の人たちが温かく迎え入れてくれているということを彼らの表情や振る舞いから読み取ることができた。村は山に囲まれたところにあり、空気がとても澄んでいて、街灯がないため夜になるとプラネタリウムで見たかのようにきれいでたくさんの星を見ることができた。私はこれほどまでに美しく、そしてたくさんの星を見たことがなかったので心の底から感動した。

マイダン村では子供たちと遊んだり、お祭りをしたりと交流を楽しんだ。その中でも私が一番印象に残っている出来事は、子供たちとの風船遊びだ。私たちは日本から遊び道具の 1 つとして風船を持参していた。風船遊びは、どちらかといえば幼児や小学校低学年が喜びそうな遊びだと思いがちだ。しかし、村の子供たちの多くが年齢に関係なく風船を追いかけていた。この光景を目にして彼らはとても純粋な人たちであるのだなあとと思った。瞳を輝かせながら風船で遊ぶ男の子、赤い風船を大事そうに抱える女の子など見ているこちら側も楽しく、そして幸せな気分になれた。こんなに喜んでくれるとは思ってもみなかったが、風船を持って行って正解だったなと思った。

村人たちは歌を歌い、ダンスをするのが大好きだ。祭りの時も誰かしらの歌う声や、楽しそうに踊る姿が見られた。日本のように周りが物であふれた生活をしていると、中々彼らのように歌って踊る機会がない。私は「ネパール＝貧しくてかわいそうな国」と勝手なイメージを持っていたが、彼らと 3 日間生活を共にしてわかったことは、彼らはかわいそうではないということだ。彼ら自身も自分たちがかわいそうだと思っているようには見えなかったし、むしろ私には彼らは輝いて見え、うらやましくも思えた。目の前のことに常に全力で、なおかつ陽気でいつも明るく、それでいて気遣いのできるネパール人。私は彼らの人間性に強く惹かれると共に自分の小ささに気づかされた。私は普段からあまり感情を表に出す方では

なく、どちらかと言えば一人静かな人間だ。そして英語が得意ではないのでつい黙りがちだった。そんな時彼らは皆私に気を遣い、優しく声をかけてくれた。嬉しかった反面、気を遣わせてしまい申し訳ない気持ちと罪悪感でいっぱいになった。それからはできるだけ彼らとコミュニケーションをとるように心掛けたが、それでもやはり積極性に欠けていたと思う。これが今回の研修の反省点であり、今後の課題にもなった。自分の頭で考え、積極的に行動できる人間になりたいと思う。

村では電波が入らないし、シャワーを浴びられないなど普段の生活では考えられない経験をしたわけだが、意外と平気だった。適応能力は素晴らしいと感じた。食事はほぼ毎回カレーで少々うんざりしたが、いつも笑顔で振る舞ってくれるので無理をしてでも食べようと思いなんとか食べきった。食事はやはり食べなれた日本の食事がいいと思った。ホームステイ最終日。別れ際にホストファミリーが「またいつでも遊びにおいで」と声をかけてくれて思わず泣きだしそうになった。文化の違いや言葉の壁があるにも関わらず、いつも明るく優しく接してくれたホストファミリー。戸惑うことも多かったが村を去る際にはまたいつかここに戻ってきたいと強く思うようになっていた。この体験は私の人生において一生忘れられない3日間となった。村人たちには本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

また、ネパールで10日間をともに過ごした学生たちにも心から感謝している。ネパールメンバーは全員で9人いたが、皆とても親切で笑顔の絶えない素敵な人たちだった。彼らは出身地も年齢も違うがこの研修が日本メンバーとネパールメンバー、両方にとって良いものになるようにいつも積極的に動いてくれていた。そんな彼らを見て、私たちも彼らの結束力を見習わなければいけないと思った。皆で協力して何かを成し遂げるということはこれから先、社会に出ても必要になってくる力の一つだ。自分よりも年下のネパール人のメンバーの一人が、自分の意見をはっきりと口に出し、思っていることを相手にきちんと伝えている様子を目にして、自分自身も負けていられないと思った。彼らと共に過ごせて本当に良かった。

ネパールで10日間を過ごした後はタイの学生と交流した。彼らと時間を共にしてわかったことがある。それはこの大学に通う学生たちは皆、はっきりとした目標や夢を持っていてそれらの実現のために懸命に努力しているということだ。日本語専攻の彼らのほとんどが将来日本で働きたいという夢を持っていた。そんな彼らを見て、ただなんとなく大学に行って授業を受けているだけの私はとても情けなくなった。もっと目的をもって物事に組みみたいと思った。

今回の研修を通してたくさんのことを考え、思い、そして感じた。これら全てはこの研修に参加しなければ感じることはできなかつたろう。研修を終えた今、本当に参加してよかったと思う。自分の狭い視野にも気づかされたし、もっと色んな世界を見てみたいと思った。また今後につながる課題もいくつか見つかったのでこれからの生活に生かしていきたい。2週間の研修は長く大変だったが、忘れることのできない2週間となった。

目は口ほどにものを言う

田中 身佳

初めに、私はこの研修がきっかけで、ネパールについて学ぶこととなり、今まで実際に現地を訪れたことはなかった。事前に学習していた各国に関する知識も、実際に体験してみると全くイメージが違ったりもした。

今回はその様な研修内で感じたことや気づいたこと、学んだことについて自分の心に深く問いかけていく内容のレポートを書いていると思う。

レポートを書いている前提として、私は過去2年間、2回連続して関ゼミのベトナム研修に参加しており、去年は自ら立候補してゼミ長も務めさせてもらった。そのため、去年までの事前準備は大変忙しく、ベトナムでの発表のための資料を分担して何種類も作る必要があったが、今回の、特にネパール研修ではそういった発表準備があまりなく、少し疑問に思っていた。しかし、実際にネパールへ行ってみてその理由をすぐに理解することができた。ネパールでは私たちの宿泊した首都カトマンズのホテルにおいてもWi-Fiが満足に使えず、停電も多い。更に私達が移動に半日以上かけて訪れたマイダン村では、Wi-Fiは一切使えず、3G回線すらきちんと整備されていないため、PCなどの設備はおろか、水道・ガス・電気などといったライフラインすら整っていない。このような状況で、今まで通りパワーポイントを使った発表など、完全に無理である。

村での生活は思っていたよりも深刻なものではなかったが、以前は水道電気も各家庭に行き渡っておらず、夕方になると真っ暗な中で生活をしなければならなかったそうである。もちろん、現代の日本からしたらありえない程不便なことばかりで、少し驚いた。

だがしかし、村に住む人々や、ネパールの学生を観察してみると、大変不便な環境の中に生活しているものの、いつも笑顔でありあまり不幸そうには見えなかったし、自分自身の感情を嘘偽りなく表現していた。

例えば、マイダン村にいる時、水場で15歳くらいの女性に、私が使っていた洗顔クリームと試供品の化粧水をジェスチャーで使い方を説明しながら渡したことがあった。彼女は恥ずかしさも感じていたようだが、隠しきれないほどの笑みを顔に浮かべて喜んでた。村の子供達に日本のお菓子を配ったりもしたが、お菓子が口に合わないようだったら「おいしくない」とはっきりと言う。また、日本食をネパールの学生達と共に食べたときも、その感想を遠慮なしにはっきりと答えていた。これらのことから彼らは自分の感情を偽ることなく、素直に表現していると強く感じた。

更に、ネパールの人々は大変優しく、気遣いができる人たちであった。マイダン村の村人たちは皆、どんなごちそうが作られているようとお客様である私達より先に食事に手を付けることはなかった。私がホームステイをしたモハンさんのお宅では、食事の量は十分か何度も気にかけてくれたし、寝る場所に関しても寝心地が悪くないかとても気を使ってくれた。現在も数人のメンバーたちとSNSを通じて毎日のようにやり取りをしているが、「村やネパール国内での不便」について申し訳ないと深く謝られたりする。これら全てのネパールの

人々の行動・言動にも嘘はないと、私は確信できた。なぜなら、私のことを気遣う際の彼らはいつも、真剣な目で私の目を見つめ、私のつたない英語にも必死に耳を傾け、コミュニケーションを取ろうとしてくれていたからだ。嘘をつかない彼らは、純粋な「本心」から滲み出たやさしさを私やほかのメンバーのことを気遣ってくれていたのだ。

彼らの親切で自分にも他人にも嘘をつかない性格を見ていると、自分は今まで自信のない自分を大きく見せようと無理をして強がって、自分の心に嘘をついていたのではないかと感じた。

私は、他のメンバーたちからよく「面倒見が良い」と言われることもあった。だがしかし、果たしてそれは本心から行っていた行動かと言うと少し違った気がする。私の目はいつも、彼らのように真剣に他人を見てはいなかった。

私は常に他人に「見返り」を求めている、「もし自分が困ったとしても、助けてもらうための保険を作る」行為でしかなかったように思うし、自分が全く心に余裕のない、かわいそうな人に見えた。

今までの私はとにかく世間体を気にしていた小心者の偽善者なのではないかと思う。学級委員やリーダーに立候補して役職や肩書きなどを得て、責任を負うことで自信のない小さな自分を華やかに装飾していたような気がする。一見すると「責任感があり、自立しているように見える人」かもしれないが、私だって誰かを頼りたいときはあるし、問題を抱え込みすぎて落ち込んでしまうことだってある。しかし、私が自ら得たその肩書のせいで、辛い気持ちをうまく発散できないことも多かった。また、私の行動が全て「優しさ」を根拠にしていたかと言われると大きな疑問が残る。心の奥深くでは、「いい人と思われたい」、「何か見返りがあるかもしれない」などと考えていたところがある。今までの自分は1人で強がって、頑張りすぎていたように思うし、それが「本心からくる純粋な行動か」と言われたら、全く自信が持てない。結局私は「強がる」、「偽善的なやさしさを振りまく」ことで自分を大きく見せていて、本当の「弱くて小さな自分」を他人に見せるのが怖くて、恥ずかしかったのだと思った。この「私の弱さ」に気づかせてくれたのは、今年度のタイ・ネパール研修であったと思う。

今後は彼らを見習って、自分の気持ちに偽りなく、きちんとした感情表現を行っていきたいし、彼らの様な「本心から他人を労われる」優しい人間性を築き上げていきたい。

研修報告書

王 啓明

今年のネパール・タイ研修は私が関先生のゼミのメンバーとして参加する2回目の研修だった。私としてはやはり、去年のベトナム研修と比較することがあり、またネパールで体験した生活を、日本や香港(出身地)の生活とも比較した。海外へ行くのは初めてではないが、

ネパールでは多くの初めての体験をした。これはこれから先、自分の生涯で絶対に忘れられない、そして今後役に立つ経験だと思う。

まず、ネパールから日本に戻って来た最初の2、3日は日本の生活に慣れなかった。ネパールでの10日間、タイでの4日間で自分の体はもう海外の生活や文化、また海外の時間に適応していたが、日本に戻ると日本の生活は豊かすぎると感じた。特にネパールでの生活は心の中に強く印象に残っている。ネパールではルールというものがないと言ってもいいが、日本はルールに縛られていると思う。私はそのようなルールに縛られた日本に戻ってから、どこか寂しいと感じていた。ルールというものは生活を便利にするが、自分がルールに違反してしまうのではないかという疑問が心の中に残っている。ネパールでの毎日の体験は自分にとって挑戦のようなものであった。例えば、車が道を走ることや人が道を歩くことに関してもルールがあまりないので、自分自身が気をつけなければいけなかった。

特に村で3日間ホームステイした時は本当に自分にとって挑戦の連続であった。研修に出發する前に村での生活の難しさを何度も聞いたが、自分は絶対に現地の生活に適應できるだと思っていた。村に着いてから、ネパールのメンバーの一人と3日間一緒に過ごしていた時に初めて本当の村で生活することの難しさを感じた。しかし、それと同時に村の人たちの優しさも感じた。例えば、私たちはゲストなので、食事は必ずゲストが先にするというのである。特に彼らは1年間に数回だけ肉が食べられるという時でさえ必ず先にゲストに食べさせるので感動した。あの時、彼らは本当は私たちと一緒に食べたいと思っていたと思う。なぜなら彼らにとって肉を食べられるチャンスは珍しいからである。また、水は村の人たちにとって凄く大切なものであるが、私たちはゲストなので、私たちだけは自由に使っても問題がなく、それにも感動した。

今回の研修で最も大きな課題は英語の交流である。ネパールでは全て英語で交流していたが、ネパールのメンバーたちは英語がとても上手だと感じた。彼らの母語はネパール語だが、学校では英語を中心に勉強する。ネパール人の中には普段はネパール語で話し、英語は学校や外国人との交流の時にだけ使う人もいた。しかし、彼らの英語の上手さを見ると、日本の大学でも英語を中心とした授業をすれば、英語力がもっと上がり、上手になれるのではないかと思った。そして、やはり外国語の上手さは勉強の時間とはあまり関係がなく、外国語を使うチャンスが多いかどうかに関係があると考えている。例えば私の場合には、日本で留学していても実は日本語で話すチャンスが少なかった。ゼミに入ると、日本人のメンバーと交流するチャンスが多いので、何となく日本語が上手になりつつある。だから、外国語を勉強するのに場所や時間、周りの環境は関係がなく、使うチャンスが多いか少ないかどうかに関係があると思っている。

もう一つ勉強したのは宗教に対する尊重の仕方である。ネパール人の80%はヒンドゥー教であり、牛は神様なので食べられない。しかし、現実には外国人もいるので、牛肉を食べられるレストランが少なくはない。ある食事の時に、日本からのメンバーたちがネパールのメンバーたちの隣で平気で牛肉を食べていて、あるネパールのメンバーが少し不安になって

いるのを感じた。彼は食事の時にずっと牛肉を気にしていて、隣で日本からのメンバーが牛肉を食べているのを心配していた。私は、他の宗教や文化に触れることも大事だが、ときには自分の宗教や文化を尊重した方がいいと思っている。また、ヒンドゥー教のことについて多くを聞くと、ヒンドゥー教に深い興味を持った。

結論として、今回の研修は英語だけの交流ではなく、環境に適応する力についても勉強した。今後いくら酷い状況に遭っても、ネパールのことを思い出せば、必ず適応できると信じている。また、今度もし時間があったら、もう一度ネパールへ行き、もう一度自分自身に挑戦したいと思っている。



海外研修レポート

比嘉 海斗

今回の研修を、村での3日間と学生交流の2つの観点で話していきたい。

まずは、私がネパールのマイダン村というところ3日間過ごして感じたこと、そして学んだことについて話す。マイダン村は、首都のカトマンズからバスで8時間移動した所にある。マイダン村の生活は僕ら日本人にとって想像を絶する世界で、正直最初は、この村に3日間も住むのかと憂鬱な気持ちになった。その村は、電気は一日の半分以上なく、水は山を40分

くらい下ったところに水道タンクがあり、そこから運ぶ。食べ物はダルバートと呼ばれるカレー味のスープをご飯にかけて食べるものと、焼きトウモロコシだけだ。だが彼らは毎日これを食べる。もちろん Wi-Fi 電波もないので、スマートフォンも使えない。本当に何も無いこの場所で最初に感じたのは、スマートフォンが使えないとこんなにも不便で、スマートフォンがなければ何もできないのかと自分が情けなくなったということだ。また、それと同時に自分がどれだけスマートフォンに日々依存してしまっているのか改めて感じた。私たちは人と人との関わり合いの中で生きている生き物なのに、私たちはこの小さな機械によってそれを失いつつあるのではないか。現代のテクノロジーの発展は著しく、世の中はどんどん便利になっている。その急速に進化する世の中が私たちを変化させ、人間の根本にあるものを失ってしまうのではないか。彼らはこの何もない村でも、日本人の誰よりもいい笑顔で幸せそうに暮らしている。私たちはこの進んだ先進国から何かを持っていき、何か少しでも力になればいいと思っていたが、実際に行ってみると彼らは何不自由なく幸せそうに暮らしていて、逆に何かを学ばされたように感じる。彼らは何も持っていないからこそ、何も知らないからこそ、人間のあるべき姿を失っていて、だからこそ幸せなのかもしれない。私たち現代人にとって、テクノロジーは切っても切り離せない存在になってしまったが、その状況を受け入れた上で、もう一度一人ひとりが本当に大切なことは何なのか見つめ直すことができれば、人々はもっと幸せになれるのではないだろうか。

次に学生交流について感じたことについて話していきたい。今回の研修は日本人9名とネパール人9名からなる学生交流であった。約1週間という短い間であったが、皆それぞれ一生懸命全員のネパール人と話すよう頑張っていた。しかしまだ日本人の異文化交流に対する姿勢が不十分だったように思える。例えば、日本人とネパール人が集まって交流するとき、最初はみんな英語で交流するのだが、疲れてくると逃げるように日本人の所へ行き、日本人だけにしかわからない話題で盛り上がっているという場面をしばしば見かけた。このような態度は、遠い所からはるばるやってきてこのプログラムに参加してくれたネパールの学生達に対してとても失礼なことであり、わざわざ海外まで国際交流をしに来ている私たちにとっても無意味である。

先ほどの例は言語の違いからくる問題だが、宗教の違いからくる問題もある。私たち日本人の多くは無宗教であり、宗教信仰者と聞くと少し悪いイメージを持つ人も少なくないだろう。しかしネパールの人々の多くはヒンドゥー教で、彼らの神様は牛である。ネパールの町を歩いていると、牛が堂々と自由に歩いているのをよく見かけるが、彼らは、神聖な動物として野放しにされている。どれだけ信仰しているかは人によって違うようだが、今回のメンバーの多くは牛肉を食べない。そうなる例えば、レストランに行くと牛肉料理がだされても、彼らはいっさい口にしない。わたしは口に牛肉を頬張りながら、ふと私は彼らの神様を堂々と目の前で食べているのかと、申し訳なくなり、微妙な雰囲気の中で食べたのを今でも覚えている。

私はこの2つの違いを踏まえて、ふと自分は本当に「グローバル人材」になれているのだ

ろうかと疑問に思った。確かに、コミュニケーションの観点から言うと、この研修中に意思伝達に困るということはほとんどなかった。だが、自分は本当に相手の文化や価値観を理解し、受け入れられていたかと考えると、まだ自分の日本人としての考え方を相手に押し付けてしまうことがよくあった。日本人はこうだからとか、日本人はこうしない、というような日本人の感覚や常識が通用するのは日本人とだけであり、海外では全く通用しない。そもそも、文化が形成される言語が違うのだから、考え方や感覚は違うのは当然であり根本から違うのである。これから社会はどんどんグローバル化していき、様々な国の人々と共に働くことになるだろう。そういった環境で生き延びるためには、もちろんコミュニケーションとしての英語も大事だが、それ以上に自分のアイデンティティを保ちつつも、違いを受け入れ、尊重する姿勢ではないだろうか。



コミュニケーションとは マイダン村が教えてくれたこと

渡邊 佑樹

9月3日から16日の約2週間、私たち関ゼミナールはネパール・タイにて研修を行った。ネパールでは、ネパール人のメンバー9名と行動を共にした。タンセン、ポカラ、カトマンズの学校や孤児院を訪問し、マイダン村でのホームステイなどを行った。タイではラムカムヘン大学の学生と交流した。市内観光や学生による自国についてのプレゼンテーションやパフォーマンスを通して互いの文化を紹介し合った。研修中に私は様々なことを経験したが、ずっと考えさせられていたことがある。それは、タイトルにもあるように「コミュニケーション」についてだ。それを強く意識したのはネパールのマイダン村に滞在している時だ。

ネパールはエベレストを始め標高 8000 メートル級の高峰を含むヒマラヤ山脈が存在する自然豊かな国だ。一方で、2014 年度のネパール中央統計局の調べによると、一人当たりの GDP は 69,919 ルピーと後発発展途上国であることがわかる。

私たちは都市部のカトマンズとはさらに格差がある農村の一つのマイダン村を訪れた。村を訪れる前にカトマンズにも滞在していたのだが、ホームステイ初日でその格差を実感した。まず、家の中に水道がない。家と家の間にある水道から水を運ぶのだ。そこで頭を洗うこともできるが、カラダを十分に洗いたければ山を 30~40 分下った洗い場に行かなければならない。また、電気はめったに通らず、停電が多いためほとんど意味をなしていない。トイレは外付けしてあるが、電気がないため夜にトイレを使う場合は携帯電話または懐中電灯の明かりで照らしながら用を足さねばならなかった。事前に話は聞いていたが、ここまでインフラの整備がなされていない環境は予想していなかった。もちろん村人の人たちとは言葉も通じない。そのような状況下で、私はこの村で 3 日間ホームステイをした。

入村した時、村人たちは私たちを歓迎してくれた。村に咲いている花で作った花輪を首にかけ、額には歓迎の印としてティカと呼ばれる赤い染料を塗ってくれた。ホームステイ先では家族が笑顔で迎え入れてくれ、ネパールの茶葉を煮詰めて作った甘いお茶ととれたてのトウモロコシをご馳走してくれた。毎回のご飯はダルバートというタイ米と豆類のカレー風味のおかずの盛り合わせをいただいた。ホームステイ先の家族に「ご飯が美味しい」と伝えると「もっと食べなさい」と言われ、毎回お腹がいっぱいになるまでおかわりした。家に遊びに来た子どもたちとボール遊びをしたり、披露するダンスや歌の練習をしたりして過ごした。このように滞在中は太陽が昇ると共に起きて朝ご飯を家族と食べ、その後は各自の仕事や学校に行き、またお昼ご飯を家で食べ、遊び、夕ご飯を家族と食べ、夜の 8 時過ぎには寝るというような 1 日を送っていた。

またマイダン村は村全体の規模が大きいわけではないため、村人同士のコミュニティが強い。近所の人とおしゃべりをしたり、他の家の子どもが遊びに来たりするのは当たり前だった。私はコミュニティ外の者だが、村人はそんな私に対してもとても温かかった。すれ違う村人全員と挨拶を交わし、ホームステイ先以外の家にお邪魔した際には、急に訪れたにも関わらずご馳走してくれた。同じことが日本でもありえるだろうか。実際近所付き合いは以前より減っている印象を受ける。まして急に見知らぬ人を歓迎し、ご馳走することは相当稀だろう。

マイダン村の人々と比較すると、研修当初の私はコミュニケーションが不十分だった。ネパール、日本のメンバー同士でお互いにかたまってしまうシーンが多々あったからだ。村までの移動時間もネパールのメンバーとの会話を交わすことを程々にして携帯を操作したり、寝たりしてしまっただ。彼、彼女らと積極的にコミュニケーションすることを避けていたのだ。ただ、マイダン村に着いてからは違った。村が小さいため、一人でいる時間がまず無い。常に人と顔を合わすため、相手とコミュニケーションをとらざるを得ないのだ。その状況に初め私は抵抗があったが、村人の温かさに触れるうちにその抵抗感は心地良さに変わってい

った。その後はネパールのメンバーとのコミュニケーションも円滑にいき、時間が少ない中で一緒に練習したダンスを村の子どもたちの前で踊りきることができた。その時の喜び、彼女らとのハイタッチは今でも忘れられない。

この研修で私はコミュニケーションとはまずその人と向き合うことだと気付いた。面倒そうだと避けていては相手との距離はなかなか縮まず、逆により距離感を感じる。まずは、相手を知ろうと面と向かって心を傾けることで自ずと相手に聞きたいことが生じ、表情も明るくなる。相手もそんな私に対し快く感じてくれる。それから対話を通じてその人自身を良く知ること、相手とコミュニケーションをとることがより楽しくなる。たしかにネパールはアジアの最貧国の一つであることはわかったが、それは心の貧しさにはつながらない。私が学んだ豊かな「コミュニケーション」がたしかにマイダン村にはあった。



貧困とはなにか

石井 侑登

2週間のゼミ研修を経て、関ゼミの目的である「アジア学生との交流」は、ネパール人メンバーと英語を介したコミュニケーションを取り合い、現地の学校や村などで行った一つのイベントに協力して取り組めたことで達成できたと思う。本来はその交流について焦点を当てて論述すべきところだが、彼らと行動をともにしている中で、日本を含めた先進国が「想像」している貧困国と、実際の貧困国との間に大きなギャップがあると感じたので、今回はあえて貧困とは何だろうという疑問について掘り下げてみることにした。

貧困について考えるとき、皆はどのような状況を思い浮かべるだろう。水や食べ物など生きていくうえでの必要最低限のものが無い状況、仕事がなくお金を稼げない状況、人それぞれ思い浮かべる状況は様々だと思うが、誰も良いイメージは持たないだろう。だが今回、後発発展途上国と言われるネパールの山奥に位置するマイダン村を訪れて、3日間ホームステ

イをし、貧困とはいったい何なのか、その意味について深く考えさせられた。

首都カトマンズから小型バスで8時間、崖っぷちの山道を登って行った先にマイダン村はあり、私たちの到着を村の子供たちが花の首飾りをもって出迎えてくれた。村には小さな学校や粘土と木でできたような家々、家畜小屋や公衆トイレなど、建造物は必要最低限のものしかなく、あとはトウモロコシ畑や広場に網を張っただけのバレーボールコートがあるのみ。第一印象は原始時代。

食事は、白い状態のトウモロコシを収穫してきて、2〜3本焼いて食べるが、味は無く、歯ごたえは良くない。このトウモロコシが主食感覚なのかおやつ感覚なのかは分からないが頻繁に食卓に出た。バッファローから絞ったミルクを発酵させたチーズのような味の飲み物も出た。豚や鶏も焼いて食べた。このように、ほとんどが村で生産されたもので、ほぼ完全な自給自足生活を送っており、食に関しては困っている様子が見受けられなかった。

続いて電気についてだが、村には電気がほとんどなく、街灯は一切ない。夜になると懐中電灯なしでは出歩けないほど真っ暗になり、足場の悪い道が多いため外出は危険。そもそも村人たちは、早朝に起きて家畜のえさやトウモロコシなどの食料を収穫しに行き、夜は翌日に備えてすぐ寝るので、街灯は必然的に不要なのだ。なんて環境にやさしい村なのだろう。

ネパールで社会問題になっている教育に関しては、少なくとも私が訪れたマイダン村の学校は機能していると感じた。生徒は全員制服を着用し、上級クラスでは英語も学習している。小学校低学年ほどの子供と英語で会話もできた。また、タンセンやポカラなどの都市部の英語学校では朝礼時に日替わりで生徒たちが全員の前で英字新聞を朗読、それに関しての自分の意見発表など、英語教育についての充実した制度が整っていた。子供たちは英語で理科や数学などの授業を受けており、英語力は日本の同年代の子供たちよりも高いレベルであった。

一方で、医療については深刻な状態だった。初めて村の学校を訪れた際に驚かされたのは、小さい子供たちの顔や頭、手や足など全身に傷や病気のような症状が見られたことだ。目脂かと思ったらそれが膿であったり、頭に大きな瘡蓋があったりした子はちゃんとした消毒をしたのかとても不安だった。なぜなら村に病院らしき場所が見当たらなかったからである。もちろん医者もいないと思う。病状が深刻な場合はポカラなどの都市の病院へ行くらしいが、非常に長い道のりである。村が岩だらけの環境だったこともあり、子供が怪我をするのは当たり前のことだが、その治療法については疑問が残った。

経済面では村でお金を見る機会は一切なかった。ただ、自給自足の生活を送っている彼らにとってもやはりお金は必要。例えば、服や食べ物を買うため、将来子供を都市部の学校に通わせるための学費など。そのためマイダン村の若者の多くは、インドを始め、ドバイ、マレーシア、カタールなどへ出稼ぎに行ったり、軍に入隊したり、ネパールの西部へ木からの浸出物をとりに行ったりしてお金を稼いでいるようだ。自給自足の生活から外れた彼らは都市部でお金が必要不可欠の生活を送らなければならない。私がカトマンズに降り立った時、バスやらタクシーやらの客引きに遭い、ようやくたどり着いた本来乗るはずのタクシー

に乗った途端、なぜか笑顔で案内してくれただけのどこの誰かもわからない人にチップを要求されたり、道路で停車した時に開いていた窓から手を差し伸べて食べ物乞いをしてきたり、やたらしつこい押し売りなど、仕事や食べ物を求めている人が都市部には多いと感じた。

このように、ネパールは貧困国に間違いはない。しかし、私はマイダン村の人々の表情に注目した。みんな笑顔で楽しそうに生活している。ホストファミリーは名前を呼ぶだけで笑顔になってくれる。世界的な視点から見たら、彼らの生活を貧困と紐づける人が多いかもしれないが、私たちからみたら不便なだけで、彼らはなんの貧困も感じていないようだった。それが彼らにとっての「普通」であり、海に囲まれ、資源にも人口にも恵まれて経済的に急成長できた日本と簡単に比較してはいけない。ものの価値観も違う。そのため、支援活動なども慎重にしていかなければならないと感じた。私たちにとって便利なものであっても彼らにとって本当にそれが必要か、しっかりと確認する必要がある。支援活動の良い例としては、日本人メンバーが数年前にマイダン村に作った水道で、これは村の人々と話し合った結果、必要と判断されて作られたものである。

結論、貧困と呼ばれる状況でも幸せに暮らしている人はたくさんいるので、彼らの生活スタイルを尊重し、私たちの勝手な判断と基準で悪いイメージと結びつけてはいけない。

研修を終えて

高山 忠浩

9月3日から2週間、関ゼミの皆と共に2週間の海外ゼミ研修をした。私は、関ゼミに所属してはいないため、うまく馴染めるか少々不安であった。しかし、皆性格が良く、すぐに溶け込むことができ、安堵した。一方、タイとネパールについて、タイは聞いて想像していた状況と似ていて驚くことはなかった。それに対してネパールは、被災地などの場所に行かなかったことが原因なのか、あるいは自分のイメージしていたネパールが発展していなかったことが原因なのか、予想より発展していると思い、驚かされた。

そのようなタイやネパールで私たちは、学生達との交流、ホームステイなどを行った。その中で気づいたことや学んだことについてこれから述べようと思う。私が気付いたことは、自分の英語力の低さと自分の環境適応能力である。そして、私が学んだことは、笑顔の大切さである。これらを順に述べたいと思う。

まず、気付いたことについて述べる。

私の英語で会話するレベルは現在、低いことに気づいた。英語でしっかり会話するということが初めてであったこともあるが、それにしてもここまで会話ができないとは思っていなかった。最初は会話をする際、伝える気持ちとジョークなどで英語が多少わからなくてもある程度は仲良くなることができた。しかし、より深く関わろうとしたとき私の語彙力の少なさ故に会話が進まず、途中で中断することが多々あり、それ以上の親睦を深めることができ

なかった。より多くの会話を楽しみたかったのにも関わらず、それができなくて非常に残念であった。

また、聞き取れないときや、言いたい言葉が思い出せない時、ゼミ生やネパールの学生に多くの力を借りた。皆に感謝すると同時に自分の英語力のなさを嘆いた。そこで、これからは英語を勉強しつつ、英語を使った交流ができる人々とより積極的に関わり、話術に磨きをかけ、会話レベルを上げていきたいと思う。

さらに、私は比較的、何処でも生きていける人間であることがわかった。何故なら、皆が風呂に入れない、食事が口に合わない、WIFIがない、退屈、など不満を言う中、私は平気であったからだ。その理由は、昔少し似たような環境で暮らしていた経験があったからだと思われる。例えば、私はWIFIがない環境や、トイレは川の水を配慮しての水の流れない汲み取り式便所、風呂は汗をかかない限り三日に一回程のペースで入る、という生活を数年程したことがある。そのような昔の経験もあり、今回のネパール研修は私にとって辛いというより、どこか懐かしい、ゆったりできる研修であった。

今回ネパールが最貧国の一つで、より厳しい環境でも生きていけると思った私は、大抵の国の環境で生きていける人間であると気づいた。これからなにかの理由で厳しい環境に赴くチャンスがあれば、率先して参加し、経験を積みたいと思う。

次に研修で学んだ笑顔の大切さについて。私は改めて笑顔の大切さを学んだ。タイやネパールで出し物としてダンスを踊ることが多々あった。振り付けを間違えてどのようにすればわからなくなったとき、笑顔を浮かべてみた。すると共に踊っていたメンバーも笑い、観客の皆も笑ってくれた。笑顔が失敗を成功に変えたのである。また、時に英語がわからなくとも会話をする時や何かを話す時は笑顔で聞いて、話していれば相手も笑ってくれて楽しくなった。笑顔の力の素晴らしさを実感した。笑顔は何故か世界共通、世界で使える笑顔は、改めてとても大切だと学んだ。これからも笑顔に神経を注ぎたいと思う。

この研修のおかげで、上記で述べたことなどに気づき、学ぶことができた。そしてこれからはすべきことも見えてきた。例えば、来年の3月に留学する件についてだ。私は来年、留学をする。恐らく周りに日本語を話せる人はいない可能性が高いため、英語だけの会話になるであろう。英語を話すことができなければ現地の人と親睦を深めることもできない。また、生活も苦となる恐れがある。しかし今回の研修で私は自分の会話レベルが予想以上に低いことを知った。これから残り半年間留学に備えて今まで以上に英語の勉強をしなければならぬことがわかった。このように多くのことを学ぶことができ、これからはすべきことをより明確にしてくれたこの研修は私にとってとても有意義だったと言える。これからはこの研修の経験を活かし、さらなる成長をしていきたいと思う。



Mero Sathi プロジェクト

Salem Nguyen

2015年4月にネパールで大震災が発生した。学校や病院などのインフラがほとんど破壊され、甚大な被害をもたらした。ネパールは小さく、貧しい国であるため、自分で復興できず、他の国から支援を受けなければならなかった。日本は過去に大震災を経験しており、どれほど大変かを知っていたので何かやらなければならないと思い、「Mero Sathi プロジェクト」が誕生した。ネパール語で「Mero Sathi」は「私たちの友達」という意味である。最初に私たちは周りの人たちから「Mero Sathi」写真を集め、大きな写真を作り、頑張ってネパール支援のメッセージを皆に伝えていた。また、「Mero Sathi」動画も作成し SNS にあげていた。なぜなら、支援をすることだけでは足りないと思っていたからである。ネパール人はお金や食べ物、そして飲み物などが必要なのではないかと考え、支援のために東京経済大学のキャンパス内と国分寺駅にて「復興支援募金活動」を行った。また、私たち関ゼミがリストバンドをデザインし、販売した。私たちはネパールへ行くことになっていたため、募金で集まった金額全額をネパールに直接持って行き、ボランティア活動をするという計画であった。募金活動は大変だったがとてもいい経験になった。これからも困っている人のために行動していきたいと考えている。

ネパールへは直行便がないため、私たちはまずタイに行き、タイで一泊した。次の日は早く出発し、3時間かけてネパールに向かった。ネパールー日目、カドマンズで「Mero Sathi プロジェクト」の8月メンバーが出迎えてくれた。初めて会ったが、彼らは親切で楽しく、たくさん会話をしたり、一緒にご飯を食べた。カドマンズはネパールの首都だが Wi-Fi がつながらず、Wi-Fi がつなげるところがあまりなく不便だった。またホテルは時々停電したりと、日本ではまず起きないようなことが起きたりもした。ベトナムよりも不便だと思った。次の日はバスで8時間程かけてタンセン村へ向かった。そこで9月の「Mero Sathi プロジェクト」メンバーと会った。私たちのために歌を歌い、ギターを弾いて出迎えてくれた。長い時間バスに乗っていると疲れてくるが、彼らたちはいつも元気で、笑顔で楽しそうだった。三日目は早朝からタンセン村にある学校へ行った。村に着いて「Mero Sathi プロジェクト」を学生たちに説明して、ラバーバンドを配った。びっくりしたことに彼らのほとんどが英語を話せた。1時間ぐらい彼らと話した。学校から戻り、マイダン村へ行った。また、2時間バスでかけて行ったが、山道は狭く、安全のために私たちは45分ぐらい歩いて向かった。私は滅多にそのような長い山道を歩くことはなく、村に着くと疲れきっていた。これからは運動不足改善のために運動したいと思っている。マイダン村はネパールでとても貧しい村なので電気や水道などがなかった。村で三泊したが、公営の水道は3-4本ぐらいしかない。食べ物はカレーとコーンだけで毎日カレーを昼と夜と2回食べた。肉は全然なく、野菜カレーであった。少しうんざりしていたが、村人がいつも親切で私たちのために作ってくれたので楽しんで食べた。村で行った祭りは皆と準備した。村人と話したり、友達と遊んだり、そこに住む村人たちの生活環境は何も不自由ではないと思った。楽観的な生活をしていると思った。

最終日には朝から村に唯一ある学校で現地の学生たちと交流し、日本のことの紹介やゲームをした。日本メンバーの絵を書いてもらい、一番上手な絵をかけた子供にプレゼントを渡すというゲームだ。子供たちが喜ぶ顔を見ている私も嬉しく感じた。その後、ダンスを踊った。日本からのメンバーはソーラン節やAKB48のダンス、ネパールメンバーはネパールの曲を踊っていた。村人たちがみんな嬉しそうな顔をしていて、子供たちも一緒に踊ってくれたので嬉しかった。

夜には服のくじ引き大会を行った。これらの服はゼミの学生たちが日本から持ってきたものだ。風船を膨らませてあげて子供たちと遊び、楽しかった。お祭りで村人が豚をさばき、焼いてくれて久しぶりに肉が食べられ、村人の心遣いを感じていた。祭りは夜中まで続き、皆が楽しんでいるように思えた。三日間、村人たちと一緒に食べたり、遊んだりして、楽しかったし、彼らが不自由そうには全く見えなかった彼らは素直で何かやりたいことや、言いたいことがあれば、はっきりと伝える。そんな彼らをみて日本に戻ったら一生懸命勉強し、やりたいことには積極的に行動したいと考えている。

次の日はポカラへと出発した。出発の前にホストファミリーからお土産をもらい、「また来てね」と言われ、涙が出そうぐらい感動した。次の日も早起きをし、ポカラまで車で6時間ぐらいかけて山を登って日の出を見に行った。私は初めて山から初日の出を見たのですごく感動した。ポカラではshamrock学校へ行った。校長先生はイギリス人なので、学生たちは皆、英語で勉強する。皆に「Mero Sathi プロジェクト」や日本の紹介そしてあげた。学生たちも踊りを披露してくれて、クッキーとソフトドリンクを準備してくれた。その後は授業を見学したり、一緒に授業を受けたりした。ポカラでの最後日には孤児院へ行っていた。孤児院と言えばいっぱい足りないものがあるのではないかと思っていた。しかし、あの孤児院は足りないものあまりなく、鶏や水牛や馬などもいた。グリーンガーデンをやっているので、自給自足の生活をしているようだ。食べ物も足りていて、子供たちにも英語を教えていたのでびっくりして校長先生には心から感心させられた。ポカラを出て7時間ぐらいバスに乗ってカドマンズへと戻ったが、マイダン村の人たちの笑顔や孤児院の子供たちとの思いでは私の心にしっかりと残っていた。次の日はタイに行くので、皆早く休んでプレゼンテーションの準備をしていた。ラムカムヘン大学では日本の紹介や「Mero Sathi プロジェクト」のプレゼンテーションをして彼らと交流した。タイはベトナムと同じ東南アジア地域で少し親しみを感じた。彼らはとても親切で日本語と英語もでき、感心した。また皆がそれぞれ夢をもって羨ましく思った。彼らと交流して私は日本に戻ってからもっと頑張りたいと思った。

研修を終えて日本へ戻ってきたが、私はこの経験をこれからも一生忘れないだろうと思う。今回の「Mero Sathi プロジェクト」でネパール大震災支援の募金活動やネパール、タイでの学生交流を通して、異文化について知ることができたし、自己啓発にもなったと思う。現在、世界では人種差別や貧困など、様々な問題がある。私は今回の研修でたくさんの体験ができたこと、そして小さなことでも社会貢献ができるということを学び、嬉しかった。これからもこの経験を活かし、何事にも取り組んでいきたいと思う。また機会があれば皆と一緒に協力して物事に取り組みたいと考えている。



《英語版 報告書》

What I learned through the study tour

Makoto Torii

The seminar training began with having a little fear and expectation. This is my second time going abroad, so everything I saw was very exciting and new to me. Especially life in the village in Nepal was impressive. The local people were cheerful and very kindness. They like singing and dancing. They always do that. I'm not a good English speaker so I couldn't talk with them much but they always tried communicate with me. I was very glad about that. At that same I felt guilty. So I tried to talk to them actively but I couldn't perfect. This is a kind of regret. I regret this thing even now and I think it will become an issue in the future for me. I'd like to take a more positive attitude not be passive.

In the village, we played with children, and enjoyed the festival. I'm happy because they were pleased. At night I was able to see a lot of stars. I was very impressed. Because I have never seen such a beautiful stars before. I will never forget this sight.

Before visiting Nepal, I thought it is poor country. But after visiting I thought it is not. Because Nepalese are always cheerful and look happy. It seems like they are enjoying their life. I think that is good thing. I didn't feel poor while spending time with them for three days.

After that we left Nepal and headed to Thailand. In Thailand, we had conversations

with local students in Japanese. They were studying Japanese. They were interested in Japan and Japanese culture. I asked someone, “Why are you studying Japanese?” She answered. “Because I love Japan and I’d like to work in Japan in the future.” When I heard that I was moved. At that moment, they looked like they were shining. I don’t have a clear dream so I’d like to find my clear dream and purpose like them. With no connection to age they are studying. Some of them are studying Japanese while working. I think that is very hard, but they have been working hard too.

After finishing this study tour, I was glad that I could participate in this training. I grew a lot and experienced many things. This seminar training became a great summer memory that I cannot forget. And I think that it will have a big influence on my life from now on.



True Feeling

Mika Tanaka

First of all, I was able to learn about Nepalese culture and custom thanks joining this program. I had never visited Nepal before joining this program. I learned about Nepalese culture and situation before visiting Nepal in our seminar. But, things I learned in class were different from “Real Situation of Nepal.”

I am going to write about things I noticed and learned through this program.

As a premise to writing this report, I had been participated “Vietnam Japan Youth Exchange” twice in 2013 and 2014. In addition, I was the leader of our seminar last year. I came forward as a candidate. Therefore, I knew “How hard the preparation of summer study tour is.” However, Preparation before visiting Nepal was not so difficult and didn’t need to make many presentations about Japan. I had doubt about that. But I came to understand sooner to visit Nepal. We were not able to use Wi-Fi completely not only in the village, but also in the hotel we stayed in Katmandu. There were many power breakdown in Nepal. Furthermore, when we were in a village named “Maidan”, of course we were not able to use Wi-Fi or 3G. Once more, there were no enough lifelines in the village. I was able to understand it was completely impossible to give a presentation using computer in the village. That was unlikely in Japanese situation nowadays. It was too inconvenient. I was surprised a little.

However, I observed people live in Nepalese village and Nepalese students, they always kept smiling and looked happy in spite of severe living environment. Nepalese people I met during this program didn’t tell us a lie, also didn’t tell themselves a lie. They were

always kind to us. That attitude was came from their true intentions or feelings. They always took honest attitude with cute smile.

For example, in Maida village, I met a girl looked 15 years old at place we took shower. I gave her a soap to wash face and some skin lotions. She looked shy but, looked very happy because she couldn't hide smiling.

When we delivered some snacks in the village, we noticed that if children received a snack they don't like, they said "I don't need more." They expressed their feeling really honestly and directly.

Furthermore, I perceived their "Kindness" was came from their true feelings directory. Because the villagers always didn't eat dishes before "guests" Guests means our Japanese members. My host family always minded me about quantity of the meal and feeling in bed. I am keeping in touch with some Nepalese members every day on SNS message. They apologized for me about inconvenience of Village and Nepal during the program. I was convinced those Nepalese kindness are also come from "True Openly Feeling" Because they stared my eyes earnestly. I could feel their shine of eyes and how they serious to think about me. I was moved very much when I noticed that.

I could notice the truth and true my character through this memorable experience. I was a "hypocrite." I was afraid to show true and my weak heart to people. I always pretend to be tough. Especially, some of my friends think "Mika is a service-minded." To tell the truth, I don't think so. I just want to collateral from people I helped. It is a very dirty mind. I think person like me is very poor.

Finally, this program gave me a chance to notice weak point of my mind and thinking, feelings.

I want to make my personality be honest and can console all people come from real intention of my heart.



Study Tour Report

Wong Kai Ming

This year is the second time for me to join this tour as a seminar member. Compare with the last year Vietnam tour, Nepal and Thailand tour was totally different. During the tour, there were a lot of new things for me to explore or discover. For me, those things are unforgettable and useful for my future. Before the departure, I had listened many

times that the quality of life in Nepal is quite hard, lack of water, lack of electricity and long distance travelling. But after reaching there, we stayed in a village with another Nepalese member for 3 nights. I got a lot of help from him. Even though the condition in the village was not so good, many things were limited there. But when I was observing the villagers, it was not difficult to find out their happiness and kindness. I could feel they were very welcome to us and some of the things they did for us made me very impressed. For example, for them there are only a few times a year when they can have meat to eat, but because we are guests in the village, so they would serve us first. When we were having the meat, they were just beside us and look at us. At that time, I felt a little guilty and hoped we could eat together. After I knew that was the culture of them, I started to eat faster and wanted them to eat sooner. And the other things that made me feel impressed was their smile. For us, the conditions there may be the hardest time that we had, but for them that is just very normal life. No entertainment, all electric devices are useless, far away from the town, and even they don't know many things about outside the village. So both of us are human, living in different styles of life but they seem to get happiness easier than us. Even though they received some old clothes from us, they already felt very happy. But if the same thing happened to us, can we feel the happiness like them. Is our life too complicated or their life too simple? If I get a chance again, I want to stay in their life style again for a long period to experience more their life style and see if I can return to the simple life or not.

The main aim of the study tour was to communicate in English with Nepalese members. English in Nepal is the second language. For a normal Nepalese student, English is started to study from primary school. Up to the college, the main language used in the normal classes is English, so all the Nepalese members can speak English very fluently. In Japan, except for English lessons, the main language used in the class is Japanese. So, what if all the lessons in Japan changed to English? Can we improve our English like them or is it not necessary to study abroad for studying English anymore. And can I say that for studying a foreign language, it is not due to where you study or how long you study. The main point of studying a foreign language is how many chances we have to use that language.

Study tour report

Kaito Higa

In this study tour report, I would like to talk about 2 aspects which are village life in Nepal and students' exchange with Nepali. First of all, I would like to start my report

from my experience and what I have learnt from 3 days I spent in village in Nepal.

The village we visited which is called Maidan is so far from the capital city of Nepal, Kathmandu. To reach the village we have to pass off-road taking us 8 hours by bus. The road on the way is very rough and dangerous which makes us feel very scary and sick.

As soon as we arrived in the village, all the children come in line and welcome us warmly with some flower arch, which was very adorable. When I saw the village, I was shocked with its appearance because it was very poor beyond my imagination. To be honest, it depressed me for a while to think that I have to spend 3 days in this place but at same time, I was also excited because it was my very first time to live in such poor place. In this village, electric is only available for less than half day which is very dark at night. In order to get water, they have to get down the mountain about for 40 minutes all the way to reach to the water system built by Japanese students 3 years ago, and they have to carry up the heavy water to go back. Where we sleep is a too small room for 2 people with full of dust. About the meal, they have nothing but some rice with curry tasted bean soup and some grilled corn. But they eat these foods every day. They have a pork but they eat it only when they have a festival occurred several times in a year. Of course there is no Wi-Fi connection as well. When I was put into this kind of situation, I was quite confused because I didn't know what to do. Every time I had a free time I was always holding smartphone in my hand to do something with it, but once they take it from me, I had literary nothing to do. This made me realized that how smartphone has been controlling my daily life and how much I have been addicted to it. People are made to interact with people. People are supposed to be related to each other, talk face to face and say directly. However, people nowadays seems to have forgotten this, and we interact with people more in social network in which we just texting and send the message without seeing each other. Technology has been developing rapidly and everything is becoming convenient more and more. However, I am also wondering that if we can follow that high growth of technology. It seems like the society is getting more dangerous, and I'm afraid if we may completely lose what people mean to be. When I saw the people living in village, I was thinking that why they always look so happy and smiling all the time even though their life condition is much worse than us. Maybe it is just because they don't have anything, so they have to be satisfied with what they have and just try to fully enjoy their life, but that's what people nowadays have forgotten and that's what we have to rethink about it one more time.

Next, I would like to talk about what I felt and learnt through students exchange with Nepali. The study tour was conducted with of 9 Japanese students and 10 Nepal students. All the Japanese students were very hard and making a lot of effort to interact

with all the members to make the problem success. However, there is still something Japanese students must improve about their attitude toward the aspect of international exchange. For example, at very first, Japanese students tried to speak in English to talk with Nepal students, but at some point when we got tired, we tend to gather with only Japanese students and talk about something only Japanese students could understand. This attitude was very rude for Nepal students who came to join the program all the way from the far place, and also it's a meaningless thing to do even though we came to another country to do international exchange. This is the problems come from language problem, but there is another problem come from different religion. Most of Japanese people have no religion, and when we hear some following some religion, we tend to have negative image about them. In Nepal as you know, most of people are Hindu, some of members of this study tour was also Hindu. Their god is cow. We usually see some cow walking around the street and let them go freely because people treat them as holy animal.

Therefore, of course they don't eat beef. When we got some beef meal at table in the restaurant, they never it. While I was just putting the beef into my mouth and feel little guilty to eat their god in front of their eye and that was awkward moment. According to these two aspects, I start to think what "global human resources" really is. From the perspective of communication, during this study tour it was not the big deal to me. However, from the perspective of understanding and accepting of different culture, I think I might push my own thinking to others. The way of thinking and value of Japan will be understood with only Japanese people, and will not be understood with people from another country. If the language which created the culture is different, everything Thing is to keep your identity and also have to try to accept and respect the differences.



Maidan village taught me how to communicate with people

Yuki Watanabe

From 3rd Sep to 16th Sep, We went to Nepal and Thailand for seminar study tour. In Nepal, we observed some schools and stayed in Maidan village for a few days. In Thailand, we introduced our country through presentations and performances. Although I experienced a lot in this program, I had one thing which I always thought. It is “how to communicate” as you can see the title. I got the answer when I was in Maidan village.

Nepal is one of poorest Asian countries and least less developed country. Maidan village we visited is poorer than urban area in Nepal. There is no water and electricity in each houses. We didn't have many chance to wash our bodies and hairs and needed light to go to the toilet in the night. I heard the infrastructure in there is not improved but I couldn't expect it well. We started to stay there for 3 days.

When we visited the village, many villagers welcomed us. They gave us flower garland and paint red color to our forehead. Maidan village is not so big, so there is a strong community and villagers have good friendship. Although I am not a member of the community, all villagers were so kind to me during my staying. For example, they exchanged greetings friendly. When I visited other house suddenly, the villager in the house welcomed and treated me she has just met. I played with a neighborhood kid sometimes. How about in Japan? I don't know same things are happened. Most Japanese tend to be unfriendly with many people in the neighborhood and hide myself from the people in trouble. I can't imagine that Japanese people welcome me who has just met.

Actually, I couldn't communicate with Nepalese members at first. Because there is a wall between Japanese members and Nepalese members. On the way to Maidan village, I didn't talk with them so much and used smart phone or slept. I was not proactive in communicating with them. But I had to communicate positively after I started to stay in the village cause of community as I told. I was a little bit nervous to communicate with people anytime. On the other hand, villagers were so kind and I could feel comfortable. After that, I could communicate with Nepalese members effectively and danced together in front of many villagers successfully. I would never forget this moment.

After this program finished, I noticed that communication was thinking about a person in front of us deeply. At first, we have to open our mind to the person. And then we can talk each other naturally and the person also will open his mind. Certainly, I understood Nepal is one of poorest Asian countries but Nepalese's mind was not poor. I found something warm in their mind and “how to communicate with people” in Maidan village.

Cultures are equal

Yuto Ishii

When we live in other cultural spheres, most people cannot help comparing the foreign culture to their own, such as costume, food, shelter and so on. It's usual. Naturally enough, some people fall into a culture shock, because they try to live with their own lifestyle. If you want to live in another other cultural sphere, you must attempt to understand their culture, and respect it. Here is a famous idiom; 'When in Rome do as the Romans do.' I think this is the best method to become friends with others easily.

The first time we met Nepali members in Tansen, they suddenly started singing and dancing in a warm welcome as they invited us to join. We were initially confused because Japanese are shy, you know it's the national character, but we joined it by diving into Nepali culture. It was lots of fun and additionally we actually could become friends even one night. I realized again the importance of that idiom.

Respecting other cultures is also necessary. Each culture has its own original lifestyle and background. Japan has been able to grow steeply because it's encircled by the sea; thus we have been blessed with plentiful marine resources. We also have a huge population. In contrast, Nepal is still underprivileged because of their disadvantageous environment. This is not equal. That's why we have to respect other cultures. There is no difference between the two. Therefore Japanese must not demand convenience in Nepali culture, and Nepalese must not be envious Japanese culture as well because cultures are inherently equal.

Through participated in this study tour as a member of Mero Sathi Project September, I learned lots of things from Nepal and Nepali members. The most impressive thing was that Nepalese were always smiling and living their life happily. In contrast, the Japanese expression was most likely serious; thus I wondered what the real poverty is. Nepal is generally called the less developed country, which almost people don't have a good impression about it, but Nepalese looked happier than Japanese. In my opinion, if they are satisfied with their life, it's not poverty. Actually, people are living with not enough electricity and water in Maidan village, but they did not look poor. General meaning of poverty is just decided by developed country with the reason that it's inconvenient for them, but if its inconvenience is the common to people who live in the country called poverty, it's impolite.

In conclusion, we must not compare cultures. We have to respect other cultures.

My impressions of Training

Tadahiro Takayama

I joined to the seminar training with members of Seki' seminar in September. I am not a member of Seki seminar, so I was a little nervous. But they are very good people, so I can befriend with them, so I was very comfortable. On the other hand, I will talk about Thailand and Nepal. I know Thailand' situation, so I wasn't surprised. But I was surprised about Nepal. Because I thought Nepal is not developed more.

We had a student exchange and homestay in such places. I learned a lot of things there. And I will talk about these. I notice my English level and my I have a great capacity to adapt to environmental changes. And I learned importance of smile. I will talk about these points.

At first, I will talk about my English level. My English level is very weak now. Though I have not spoken English with foreigners, I don't know that I can't speak English. I was very surprised and shocked. At first I tell joke and feeling and we can befriend students. But I can't befriend anymore. Because I have little vocabulary, so when we talk together, we must stop talking. I want to talk with students but I can't, so I feel very disappointed.

On the other hand, Seki' seminar and Nepali helped me when I didn't hear what they said and I didn't know what I should say in English. I appreciate for them. And I'm very sad about my English level. I thought that I must study English hard, I must associate with the English-speaking world positively and hone one's skills of joke and I will be a good English speaker.

At second, I can live in anywhere. Because I'm fine when everybody complained about life in Maidan. For example, "we can't take bath, foods are not good, not WIFI". And I know Nepal is a state that belongs to the poorest nations, so I thought I can live anywhere. If I have a chance in a rocky environment, I will take part and I gain experience.

Next, I will talk about what I learned smile' importance. I learned smile's importance. When I danced, I forgot the dance moves. And I tried smile. And everybody smiled. Also when I talked with students in English, I tried smile. And we could be smile. I learned smile is very important. I thought I must practice smile.

I learned a lot of things and I knew what I should do, so it's very good for me. I want to draw from this experience and do my best.

Report of Mero Sathi project

Salem Nguyen

In April 2015, a huge earthquake devastated Nepal, causing widespread destruction. As a developing country, Nepal ran into challenges of rebuilding its infrastructure and thus, is relying on foreign aids. As university students, we would like to do something to help out Nepal mentally by spreading the words – raising awareness to people around the world.

We encourage friends and families to take picture with a piece of paper with the line “Pray for Nepal”, put the pictures into a board and send the board, together with my seminar’s slogan – “We will always be by your side – Nepal” to Nepal. On SNS, we always have the hashtag “#prayfornepal #yourpainourhurt”. Later on, we made a short video titled “Mero Sathi”, which means “My Friend” in Nepali.

However, we realized what we had done was enough. We decided to raise some money for Nepalese. We asked for donations at Tokyo Keizai University and Kokubunji Station by selling the “Mero Sathi” rubber band. We hoped that physically appearance and hands on volunteer would help Nepalese a little bit, so we went to Nepal with all the money we were able to raise.

In the first day at Tansen we met with the Nepalese team who traveled with us 5 days. That first night, we arranged a networking event to start the Mero Sathi project. We were dancing, singing and working together like we were one united family.

The next day, we went to Maidan village – the poorest village in Nepal and stayed with villager for 4 days and 3 nights. We – a group university students from a developed country whom have been provided with one of the highest qualities of life, had never experienced such disconsolations. People at Maidan village are deprived of essential elements of life, including water, food, and electric. They all have to live in a tiny and dark house I would rather call a tent. Their main food is corn and vegetable curry, and they only have two meals per day. People from our group were divided into team of 2 – one from the Japanese team and one from the Nepalese team, to stay at different house.

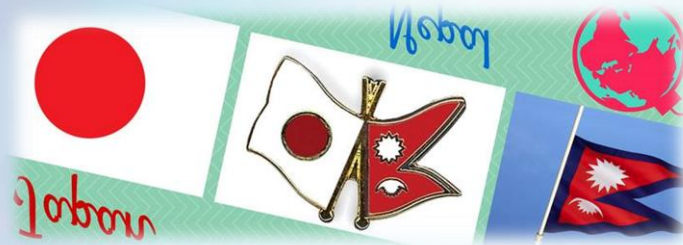
We spent 2 days to prepare for a small “festival” for villagers on the last day before we are leave. It is heartbreaking to see these people living in such miserable condition, but still show their hostilities to their guests. For the festival, the villagers killed a pig, one of the most precious food sources they have there, to treat us. Lots of people here had never have a chance to eat meat before, as they only can afford vegetable and corn. We organized a small fun game for villagers and awarded them with clothes we brought from Japan. Being able to see the smiles on people’s faces when they received the clothes was the best thing we got from the trip. It reminded how we can touch lives in such a simple

way.

We went back to the city and prepared for our presentation on this project in Thailand and at Tokyo Keizai University later on. What happened in Nepal was heartbreaking and we were all glad we could bring a little help to the Nepalese's lives. It has been an eye-opening experience for a lot of us as we got to see how people around are suffering from disasters.



《ネパールメンバーからのメッセージ》



プシュパ (Pushpa)

"Mero Sathi Project" taught me how important it is to have a good friendship bond with people. In our lives, we face a lot of troubles, and there are so many ups and downs. But I rephrased that avoiding them is not the solution. Through this project, I've healed much of myself. Since my mind was always occupied by the thought that I was not good enough for anything, I believed myself more in me that I could actually do anything. So to all the people out there, who think that they're not good at anything, just to remind you that nobody's perfect but everyone's imperfectly perfect. That is one of the biggest tips I learned working on this project. And also talking about my impressions, I was really inspired with so many things by our Japanese members. The very first thing was their humanity. And the way they organize every task they put forward to. Something to learn for all of us. Staying together for 5 days at Maidan made me feel like we were more like a family. We got to know each other, learned a lot of stuffs and experienced a lot of beautiful things. And this is going to be one of my favorite memorable moments for a life time. Thank you so much!



プジャ (Puzza)

First of all, I was very happy to be a part of Mero Sathi Project. It was my first new experience. Being together and working with Japanese members and Nepalese members was really fun. I learned a lot of things about people, life and friendship. Through this project, I developed myself confidence and built a strong state of mind. Overall this project was something absolutely beneficial for me. And I hope it was for everyone too. I had a really great time. And I am going to miss this moment forever.



シュシラ (Sushila)

Mero Sathi Project tour was very memorable for me. Firstly, this project helped me to meet and make new friends both from Nepal and Japan. Secondly, I got to know and experience the life at remote village of Nepal which I didn't do before. Thirdly, this tour gave me opportunity to learn some Japanese culture. Most importantly, I was surprised of their punctuality and activeness at any hours of the day and I feel we should be learnt that from Japanese friends. Every member was very friendly, understanding and cooperative. Together we had so much fun and enjoyed every moments. I am glad to be part of this project tour. Thank you!



ジョティー (Jyoti)

I felt glad to be the part of this project and very happy to meet you and all the member of this project. All the members Nepalese and Japanese both are very good. Through this project the bond between Nepal and Japan became more closed. You guys had stay so comfortably in the village. I was little bit surprised lol! I saw the happiness of the villagers when I distribute the clothes that you guys had brought for them. I am glad to give with my hand to them all thanks to Yuto he asked me to help. I am happy Thank you so much for the beautiful gift. I had experienced the remote village life through this project, I even carry the water from the water tank from my home stay it was very far from the house and the way was very danger for me. Heartly thanks a lot for coming Nepal. Mero Sathi Project is very good. Exchange of cultural and education and more enjoyment. This September Project was more Funs and enjoyment parts!!



ミラン (Milan)

Sept 5th of 2015 will be I think the most memorable day in my life.....I was really lucky to join and be one of the member of Mero Sathi project..... Culture program exchange was not just to exchange culture between japan and Nepal for us...but to experience many new things that we can learn from different people of the world.... As I was born in village and had little bit of experience about village life...I felt that I really had much more experience...5days at Maidan village, Palpa..... So from Mero Sathi project ... I learnt the most important thing is to work in a team when you are a part of team and we should be able to cope within ourselves just like Mero Sathi team..... So you learnt about Japanese people and how their culture are....learnt about friendship...and most importantly to work co-operatively and supportively to each other in a team so, I am lucky that I got something from the project which I wouldn't be able to in my life. Thank you Mero Sathi project..... and missing all the members.....



ノラージ (Nauraj)

It was great pleasure for me to involve in this "Mero Sathi Project September". Despite the difficulties there, I really enjoyed and had life time experience. It was great to know some Japanese culture and educational matter. The most interesting part for me is, interaction between Japanese and Nepalese member. I am sure that people there in Maidan village had enjoyed the program too even after the devastating earthquake that hits last April. And I wish this kind of program may conduct in upcoming days. Thank you.



サンジェ (Sanjay)

Here are my feelings about project....

1. whether we are from different countries, nation, speak different languages, culture and religion, but first we belong to human and we are common... despite Makoto and I did not talked much but I could read through his eyes....I can understand what he wants to say...

2. I learnt that being rich is not about how much you have but it's about how much you share....

When Japanese members were distributing clothes to the villagers I could see that villagers were very happy...

3. Money attracts money and love attracts love.....

When Japanese members were distributing clothes, chocolates and snacks... by seeing the smile and bright eyes of villagers, I felt happier.



ラケシュ (Rakesh)

First of all... the idea about this project was itself very amazing... I had a great time with you guys... every moment was memorable. I learned too many things. I learned three different languages. Not many but few words but still meant a lot to me... I can't even express my feelings by words ... yes I can say I made many friends. I even made a bro... In overall view it was tremendous experience!!

《タイ、ラムカムヘン大学学生からのメッセージ》



テン

東京経済大学の学生たちと交流した際に、私は自分の勉強した日本語を実際に使うチャンスがあった。そのおかげで自分の日本語能力の弱点がわかった。東京経済大学の皆さんは優しく、皆さんと日本語で話が出来るととても面白くて楽しい時間を過ごすことが出来た。

また、Mero Sathi Project を通して、ラムカムヘン大学の皆は今回の地震で困っているネパールの被災者の痛みや苦しみを知ることが出来たし、皆さんがどのような支援を行ってきたかがすごくよくわかった。私は、このプロジェクトはとても良いプロジェクトだと感じた。これからもぜひ続けてほしいと思っている。

今回の学生交流はラムカムヘン大学の学生にも大変為になった。私もとても楽しくて、いい経験ができた。今回は参加させていただきありがとうございました。



ビア

私はこの交流会に参加してこれまで知らなかったことを知ることが出来た。

ネパールの現状のことも私たち参加者に教えてくれたし、ネパールを助けたいと思っていたが、どうやって支援すればいいかわからなかった私も少しでも力になれるということを知ったし、とても為になった。

交流会ではネパールのことだけではなく、タイと日本の文化交流もできた。日本についてや現在の日本の問題、そして日本への留学のアドバイスまでも教えてもらい、日本語を勉強するタイ人の学生の為になったし、参加して本当に良かったと思う。

今後もこの調子でプロジェクトを続けてほしいと私は期待しているし、もっともっと上手くいくことを願っている。楽しい時間をどうもありがとうございました。



スナコ

東京経済大学との交流会に参加して、とても楽しかった。大きな地震で困っているネパールの方たちを支援する目的の **Mero Sathi Project** の話を聞いて、たくさん困っているネパール人がいることを知り、被災者の気持ちを考えるようになった。また、日本の文化や日本が抱える大きな問題についての発表を聴いたり、一緒にダンスをしたりして、とても楽しかったし、勉強になった。特に印象に残っているのは日本の社会問題でもある「高齢化」のこと。タイでも高齢化になる可能性があるので、この問題についてはよく考えないといけないだろうと思った。発表を通して皆さんの素晴らしさが伝わってきた。タイで皆さんと一緒に楽しい思い出を作ることが出来て本当に嬉しかった。もし、日本に行く機会があればまた皆さんと再会したい。

交流会の次の日には一緒に観光が出来てとても楽しかった。皆さんがタイの文化やタイ料理を気に入ってくれてとても嬉しかった。

今回の交流で「世界が一つになり、みんなが平和で生きるためには異文化との交流が大切だ」と分かった。これからも皆さんの活躍を応援していきたい。

※タイメンバーの名前はニックネームです。

9. 帰国後の啓蒙活動

<具体例>

・上智大学大学祭にてユニセフと共同パネルディスカッション及び活動紹介



学生リーダーの関愛生とユニセフ職員3名によるトークセッションを開催。世界で活躍されている職員3名から、世界の現状や問題など貴重なお話をお聞きしました。イベントは立ち見が出るほどの大盛況!!

・東京経済大学大学祭にて活動紹介



これまでの支援活動の紹介、9月の研修報告を行った。ネパールやネパールの現状について知ってもらえるいい機会となりました。

・啓明学園中学校（文部科学省スーパーグローバルハイスクールアソシエイト指定校）「グローバル講演会」にて活動紹介



関先生と8月プロジェクトメンバーが啓明学園中学校で講演。実際に支援する上で発生したトラブルについて説明し、各学年混合グループに分かれ、「支援を継続すべきか、中止すべきか」ということについて議論。単純な議論だけではなく、建設的な意見を出し合って、グループごとにアイデアをまとめてもらった。

・ラムカムヘン大学（タイ）におけるメロサティイベント開催



・ベトナム国立人文社会科学大学（University of Social Sciences and Humanities）におけるメロサティイベント開催



・東京経済大学にて特別講演会を実施し活動紹介



「青年海外協力隊ってすごいこと？」

～出来るか出来ないかではなく、やるかやらないか～

関ゼミ OG でもあり、元青年海外協力隊としてモロッコで活動されていた小林里佳子さんを講師にお招きし、講演会を開催。

また、啓明学園高校の皆さんによるカンボジア支援プロジェクトについての発表も。

10. 2月に再び被災地支援に挑戦

夏のプロジェクトの反省を生かし、現地学生と被災地支援プロジェクトの準備中。これに向け、啓明学園中学校高等学校の学生メンバー及び教職員の皆さんも、これまで長年培ってきた多文化理解教育の知識や文部科学省スーパーグローバルハイスクールアソシエイト指定校としての経験も踏まえ、積極的に助言をくださっています。

なお、以上の取組を編集したビデオクリップと PowerPoint はこちらでご覧いただけます。

https://www.youtube.com/watch?time_continue=1&v=B5azIcch8I

(東京経済大学 3年 石井侑登 編集)

<https://sg1b-broadcast.officeapps.live.com/m/Broadcast.aspx?Fi=0f06d149f280e750%5F3bf84fae%2D20fd%2D4b20%2Da4e0%2Df21524d68ea7%2Epptx>

(東京経済大学 関昭典ゼミ 作成)



Mero Sathi Project 2016

February



私たちは2月に Mero Sathi Project February として上智大学、東京大学、東京経済大学、近畿大学、啓明学園高校の学生8名が集い、タイとネパールで活動を行った。今回のツアーの一番の目的は、8月のツアーで失敗に終わった教育支援プロジェクトの再挑戦であった。前回の反省を生かし、ツアー出発前に現地で万全の準備を整えておいた。そのため日本メンバーは現地で支援活動を行うというよりも、現地での支援体制がきちんと整えられているかを確認するという任務が主であった。具体的に言うと、支援施設の完成の確認や、支援プロジェクトに関わる現地の村人へのインタビューなどを実施した。これらの活動はネパールメンバーの協力があったからこそ実行できたものである。当報告書では、日本、ネパール両メンバーにより現地での活動を報告するとともに、当ツアーの目的の一つでもあった学生交流についての考察を日本メンバーより述べたい。

<研修日程表>

2月12日	成田→タイ、バンコク	ラームカムヘン大学の学生と夕食
13日	バンコク→カトマンズ	ネパールメンバーと顔合わせ オープニングイベント
14日	カトマンズ	NGO、孤児院訪問
15日	カトマンズ→ヌワコット	仏教寺院見学、被災地に移動
16日	ヌワコット	被災現場、ヤギ小屋見学、 インタビュー実施
17日	ヌワコット→ポカラ	クッキング交流、バス移動 ポカラ散策
18日	ポカラ→シクレス	ジープ移動
19日	シクレス	ヒマラヤハイキング、Owl Festival 参加（ダ ンス披露）
20日	シクレス→ポカラ	グルン族インタビュー ジープ移動
21日	ポカラ	私立小・中学校で国際運動会実施
22日	ポカラ→カトマンズ	サンセットハイク、10時間バス移動
23日	カトマンズ	ミニディスカッション、国営ラジオ出演 クロージングセレモニー、お別れ会
24日	カトマンズ→バンコク	トランジット
25日	バンコク→成田	

プログラムコーディネーター

氏名 Kshitiz Bhattarai (AAEE メンバー)

アシスタントコーディネーター (1)

氏名 Sharad Kumar Sharma (AAEE ネパールコーディネーター)

プログラムスーパーバイザー (ネパール内全行程同行、日本語、英語)

氏名 関昭典 (AAEE 代表理事)

《メンバー紹介》

✈✈✈ From **Japan** ✈✈✈



吉川夕葉

- ・ Student Leader
- ・ 上智大学総合グローバル学部1年
- ・ 着眼点が鋭い
- ・ クールに見えてアツい

永淵沙也花

- ・ Student Leader
- ・ 上智大学総合グローバル学部1年
- ・ ポジティブ
- ・ みんなを笑顔にするハッピーガール



米原慎子

- ・ 上智大学総合グローバル学部1年
- ・ 親しみやすさ NO.1
- ・ 何事も真剣に考える



山岡大地 (ネイチャー)

- ・ 上智大学総合グローバル学部1年
- ・ 皆を引っ張る存在
- ・ カメラマン
- ・ 代謝の良さが尋常じゃなく、ネジが外れると面白い



小田 颯規

- ・ 東京大学文科三類1年
- ・ 誰とでもすぐに仲良くなる
 - ・ とにかく素敵な笑顔
- ・ 頭の回転が早く、しっかり者



吉田 梨乃

- ・ 啓明学園高校3年
- ・ 最年少で挑んだ、スーパー高校生
- ・ オンオフの切り替えがしっかり
 - ・ 音外とア女

劉 寛艶

- ・ 東京経済大学院1年
- ・ 優しくて気配りができる頼れるお姉さん
 - ・ 天然!?
- ・ テンションが上がると人が変わる



大平 啓太

- ・ 近畿大学経済学部会計学科3年
- ・ 圧倒的なコミュカを誇るムードメーカー
 - ・ 人生の先輩
- ・ 強い信念を持っている

✈✈✈ From **Nepal** ✈✈✈



Kshitiz Bhattarai

- ・ プログラムコーディネーター
- ・ 皆のまとめ役
- ・ 賢く、頼り甲斐がある、イケメン

Sharad Sharma

- ・ いつも皆を気にかけている
- ・ ムードメーカー
- ・ 仕事が早く、的確
- ・ 頭が半端なくいい！



Shrijana Poudel

- ・ Student Leader
- ・ クールでしっかり者
- ・ ミランダカーそっくりの美人
- ・ Kshitiz 同様まとめ上手



Sonuj Giri

- ・ しゃべりだすと止まらない
- ・ 優しくて誰とでもすぐに仲良くなれる
- ・ 興味が幅広く知識が深い
- ・ 値切りトモ





Grishma Bhattarai

- ・ とっても明るくて優しい
- ・ 涙もろい。笑顔が輝いている
- ・ カッコいい一面あり!?



Bibhuti Malla

- ・ 話やすく、気軽に声をかけてくれる
- ・ 物事を深くまで考えている
- ・ 真面目だけど、イケてる
- ・ 自分の考えをしっかりと持っている

Shreeya Davkota

- ・ クールビューティー
- ・ おしゃれ
- ・ 親身になって話を聞いてくれる
- ・ 頭脳明晰で頼りがいがある



Saujanya Pokhrel

- ・ かわいい愛されキャラ
- ・ ツボが浅く良く笑う
- ・ 最高にノリがいい
- ・ サングラスが似合う



Marbal Sunuwar

- ・ おしゃれ番長
- ・ サッカー大好きなシャイボーイ
- ・ 音楽好き
- ・ 将来大物になりそう



「FACE to FACE で交流する重要性」

大平啓太（近畿大学3年）

交流に必要なことは **Face to Face** である。これは国際、学生に問わず言えることだ。顔を見せ合い、同じ時間・空間を共にすることで相手を理解することができるためである。

近年、技術革新の激しさから人と人の交流は直接会わなくても容易にできる。例えば **LINE** や **Skype** などの方法があげられる。また、**SNS** を通じ相手の行動を簡略ながら把握することができる。ゆえに、私たちは **Face to Face** で交流する重要性に気づいていない。むしろ、その利便性から **Face to Face** を避ける傾向にあるのではないかと考える。

私はプロジェクトを通じ改めて **Face to Face** であることの重要性を認識した。日本メンバーについてだが、私は和歌山県出身のため、関先生以外のメンバーとは出発前日に初めて会った。もちろん、事前に何度か **Skype** 等を用いて交流を図っていた。**Skype** の内容としては、雑談や今後のスケジュールなど幅広く会話し、パソコンの画面には各々の顔も映り、ある意味 **FACE to FACE** であったと言える。しかし、当日はお互いに日本語で容易にコミュニケーションが取れ、同じ学生であるにも関わらず、緊張し話すことができなかった。案の定、ネパールに到着し交流を行うが、始めはまともに会話すらしていない。これは、英語の上手下手に関わらず言える。ただ、時間が経過するにつれて会話が弾むようになってきた。これは同じ時間・空間を共有してきたからだと考える。

この経験から **FACE to FACE** の重要性に気付く。やはり、互いに顔を見せ合い、同じ時間・空間を共にすることで生まれる信頼関係は非常に密の濃いものである。確かに人と直接会う時間を削減することは、時間の有効に活用する方法の一つであるかもしれない。実際、**LINE** や **Skype** は便利であり、ビジネスではメールや電話で済ますことも多々ある。削減し、生まれた時間を有効活用しているのが現代の傾向であり、それが望ましいことであると考えられる。しかし、私は無意味かもしれないが人と人が直接会い、話す時間を取る重要性を訴える。同じ目的の達成のため、互いに **win-win** の関係を構築するためには **FACE to FACE** はなくてはならない。これを削減してしまえば、人と人との関係性は薄く内容の無いものとなる。

そして、国際交流では「郷に入れば郷に従え」という事を意識する必要がある。これは、相手の価値観や考えに合わせるという個人ベースではなく、その土地や国の固定観念に合わせるということである。日本とネパールは明確に国民性では異なる部分がある。例えば、時間厳守の重要性やメリハリを持つことを日本人は重んじる傾向にあるが、ネパールはそうでないという点があげられる。異なる価値観や考えから分かる点もあり、それを押し付けることは横暴でしかない。

つまり、交流の際は互いに認め合い、**Face to Face** を実践することが重要である。同じ学生、異なる国であっても、単純にそれを繰り返していくことで人と人とは繋がるのだ。

「本当の国際交流を経験したスタディ・ツアー」

小田 碩規（東京大学1年）

近年、「国際交流」とか「学生交流」という言葉をよく耳にする。では、「国際交流」とか「学生交流」とは一体、どのようなものなのだろうか。海外の学生と英語で話をする、異国の文化に触れる、などといったことが挙げられる。しかし、そのようなことだけに終始してしまっただけでは本当の「国際交流」とは呼ぶことができないと私個人は考える。

本当の「国際交流」の意義は、様々なバックグラウンドを持った異国の学生と共通の問題を考え、悩み、議論することで思いもよらなかったアイデアを生み出すことにある。この観点から考えると、Mero Sathi Project は本当の意味で「国際交流」を体現したと言える。

本稿では交流を通して感じたこと、交流によって得ることができたアイデアについて述べる。交流を通して感じたことはコミュニティーの違いや、常識の違いである。今回の Mero Sathi Project ではカトマンズ寄りのヌワコット村、ポカラに近いシクレスという集落を訪れた。ヌワコット村では被災地の現状を知るアクティビティーを行った。いまだに満足いくような支援が行われているとは言えない集落に対して、インフラの整備が優先されるべきか、収入を得るためのリソース支援が優先されるべきかについて議論したことは今後、復興や開発を学ぶ際の一つの視点となった。ヌワコット村で衝撃を受けたことは、環境問題に対する無関心さである。プラスチックの袋を燃やしたり、焼畑をしたりと、日本では一般的に環境にとって悪影響であると認識されていることが普通に行われていた。

シクレスではグルン族の習俗に大きな衝撃を受けた。女性に対する制限、カーストに関する差別、近親者と婚約するという進化的に利点が少ない結婚制度など、日本では考えることができないような習俗がシクレスには存在していた。

今回、交流をする中で様々な興味深いアイデアが生まれたが、最も印象的なものは「心の豊かさ」についてのアイデアである。日本人グループが今回の Mero Sathi Project での目標としたものの一つに「心の豊かさってなんだろう？ネパール人の心はなぜ豊かなのだろうか？」というものがある。ネパール人メンバーや、ヌワコット村の村人たち、シクレスのグルンの人々の間には「心の豊かさ」に関する似通った考えがあることを感じた。それは「現状を楽しまなければならない」というものだ。無い物事を嘆くよりも今あるものを最大限生かして楽しまなければならないという考え方が彼らの頭にはあるのだ。このようなネパールの人々のポジティブな考え方が彼らの心を豊かにしているのだ。この考えは現代日本人の心を豊かにすることにも役立つ。無いもの、失ったものに固執し、現状を楽しむことができない人々は、一度自分の置かれている状況を見直して生活を楽しむために活用できるものは残っていないかを探してみるべきだ。

このように発展途上国のネパールから先進国で暮らす我々が学ぶことは大いにある。異国の学生と共通の問題について考え、議論し、時には教え、時には教わり、革新的なアイデアを生み出す。これが私の考える国際、学生交流のカタチだ。

「真の学生交流は互いに関心を持って相手の事を理解したその先にある」

永渕沙也花（上智大学1年）

今回、このツアーを行うにあたってネパール渡航前に日本からのメンバーが全体の目標として掲げた事、それは“現地との交流を通して得た気づきから多くの学びを得て自分自身の心を豊かにする”、また“お互いの共通点や良いところを見つける”という事であった。途上国に行くと、我々日本の様な先進国から来た者は無意識的に自国と比べて劣っている面に目を向けてしまう。実際に、私自身も昨年の夏にカンボジアへ行った際、初めはストリートチルドレンや都市部と農村部間の格差、ゴミ山といったカンボジアの抱える貧困を始めとするあらゆる社会問題に目を向ける事が多かった。しかし、周りを見渡してみると、そこには日本にはない様な景色、農村部におけるゆったりとした人々の暮らしといったそこにしかない魅力が多くある事に気づかされた。そのため、今回のネパール滞在では目標にもある国の魅力やそこにしかないものを見つける旅にしようと決めていた。

実際に現地へ赴いて日本へ帰国した今、実感しているのはネパールには多くの魅力があり、それはある意味日本が先進国として発展していく中で失いかけたものなのかもしれないと言う事である。それらは、あらゆる場面にわたっており、例えばネパールの人々の時間の過ごし方や村の伝統的な儀式やコミュニティ内の人々の繋がりや深さであったりと、様々である。さらに、その一つとして、現地の学生の持つ学びに対する追究心や探究心といった積極的な姿勢にはこのツアーを通して私自身大きく刺激を受け、また自分自身の意識のあり方の変化にも繋がった。

ネパールに到着して、初めは英語でのコミュニケーションの環境に中々慣れず、自分から積極的にコミュニケーションを進める事が困難だった。しかし、私が理解できていないとゆっくり分かりやすい言葉で話しかけてくれたり、いろいろな質問をして積極的に会話を進めてくれたりする現地の学生達に何度も救われた。

ツアーの終盤には、村でのインタビューといった実践的なプログラムを終えて行く中で国の抱える問題といったアカデミックな話を日常的にする事が出来る様になった。私が元々関心を持っていた教育問題についても実際に現地の学生と話す中で、何が原因で問題解決のために今、一体何が必要とされているのかといった現地で生まれ育った学生の生の声を聞いてみて日本にいる時には得られなかった新たな視点を得る事が出来た。こうした現地学生と過ごす日々を通じて実感したのは、真の学生交流は互いに関心を持って相手の事を理解したその先にあるということであった。また、実際にその国で生まれ育った学生と話し、さらにその現状を自分の目で見てみて、初めて正面から課題に向き合う事が出来るのだと2週間を通して強く体感した。

その意味で、学生交流はその国をよく知る上で重要な過程であると思う。国の将来を担うのは、どの国や地域においても若者であり、若者とはその国の最大の財産であると思う。だからこそ、様々な国の学生が自分とは異なる環境下で生きてきた学生と関わり、自分の価値観や知見を広げる経験の出来る学生交流は今後益々普及すべきであると思うし、私自身もっと色々な国の学生と関わり、1つ1つの出会いを大切にしていきたいと思う。



私が体験した「学生交流」—成果と課題—

山岡大地（上智大学1年）

1. はじめに

私は高校生のとき一年間の留学を経験した。アメリカの公立高校に通いながら留学生用の寮で暮らしていたため、毎日が「国際交流」だった。中国人、タイ人、ベトナム人、ドイツ人、デンマーク人、イギリス人、スペイン人、イタリア人、フィンランド人、メキシコ人、ブラジル人、そして日本人が同じテーブルを囲み、一つ屋根の下で一年間生活を共にしたという経験は、現在の私にとってもかけがえのないものである。英語でのコミュニケーション能力を培うと同時に、「国籍が違う者同士でも友達、あるいは家族のように親しい関係を築くことができる」ことを学んだ。

今回のスタディ・ツアーのテーマは「学生交流」であり、ネパール人メンバーと日本人メンバーが行動を共にし、関係を築いていく中で新たな学びを得ることを目的としていた。日本人メンバーの中で海外での長期滞在の経験があるのは私だけだったため、より積極的に現地の学生と交流し、必要に応じて通訳などで学生同士のコミュニケーションをスムーズにすることも私の役割だと考えていた。

この報告書では私が体験した「学生交流」に関して、その成果や感じたことをいくつかの項目に分けて述べていくことにする。

2. 現地の学生と行動するメリット

現地の学生と行動するメリットとして、その地域により深く入り込んで学びを得られることが挙げられる。例えば地震の被害が深刻だったヌワコット村でフィールドワークを行った際、ネパール人と日本人がペアになり家を訪問するという形式をとったが、この試みは非常に効果があった。私が訪ねたご家庭は夫婦二人暮らしで、地震によって自宅が損壊し、現在は隣に建てた仮設の住宅に住んでいた。これらは外見からでも分かることだが、ネパール人メンバーの通訳を介してご夫婦が直面している課題や、彼らの今の心情についても聞くことができた。実家が壊れてしまったため、首都で暮らす息子たちが以前ほど頻繁に帰省

することがなくなり、ご夫婦が寂しい思いをしていること。地震によって収入源を失い、飼っていた牛を売って一時的に金銭を得たが、行政による支援もないため生活が非常に苦しいこと。仮設の住居には雨水が入り込み、蛇なども容易に侵入するため夜間怖くてよく眠れないこと。これらを知ることだけでも現在の支援のあり方や国の復興への取り組みについてより深く考察することができた。通訳を担ってくれた現地メンバーとインタビューに答えてくださったご夫婦にはとても感謝している。

3. 言葉の壁をやぶること

ツアー中、私が最も意識していたことは、とにかくネパール人メンバーと話をすることだった。「ネパール人の前では日本語で会話しない」というルールを日本人メンバーの中で決めていたので、移動中なども可能な限りネパール人学生の輪の中に入り、英語でコミュニケーションすることで徐々に信頼関係を築くことができた。他のメンバーから通訳を頼まれる場面もあり、私がツアーに参加している意義を見出すこともできた。一方、ツアーが後半になるとルールが曖昧になってしまい、日本人同士の会話が増えてしまったことは反省点として挙げられる。

言葉の壁は厚く、ツアー中に完全にそれを取り払うことができたわけではない。私の英語力の未熟さを実感する場面も多々あった。しかし、ポカラからカトマンズへ戻る道中、双方の国の教育、政治、歴史など学術的な事柄について踏み込んだ話をネパール人メンバーとすることができ、自信につながった。ネパール人メンバーが英語を話す能力に長けていたことは、単純にコミュニケーションをとりやすくしてくれる以外のメリットがあった。彼らがシンプルで的確な単語を使いこなし、会話の中で手本を示してくれたことは、これからも継続して英語を学ぶモチベーションを私に与えてくれた。

4. 「違い」を認め、それと向き合うこと

上述のとおり、私は「国籍に関わらず、人は友人関係を築くことができる」と考えており、今回のツアーでもネパール人との交流の中でそのことを実感できた。一方、日本人とネパール人の間に差異を感じることも多々あった。例えば、日本人は集合時間5分前には集合するが、ネパール人は集合時間5分後に集合する。大したことではないようにも思われるが、ツアーを円滑に進めていく上では問題である。時間を守る日本人が正しいわけではないし、時間にいい加減なネパール人が正しいわけでもない。ただ、互いの習慣や育ってきた環境により必然的に「違い」が生じているのだと実感した。

このことは決して時間を守る、守らないといった話に留まらない。ツアーに参加した目的ではネパール人と日本人の間に大きな差があった。ネパール人は日本人との交流よりも、ネパールの様々な場所を巡るというツアーの内容にひかれて参加したメンバーが多かった。また、ディスカッションの時間を確保したいと日本人の学生が提案し、了承したはずの現地コーディネーターがなかなかその場を用意してくれず、苦勞するということがあった。ヤギ小屋プロジェクトを現地の住民と進めていく上でも、その持続性・汎用性が今後の課題となる。しかし、どの状況においても「なんで言うことを聞いてくれないのだ」と投げ出すので

はなく、相手との「違い」を素直に認めることが必要だと思う。その上で、現地の人たちに寄り添い、どう折り合いをつけて活動を進めていくかを考えていくことが重要だと強く感じた。

5. 次につなげること

二週間の旅を経てネパール人メンバーとの絆は強固なものとなった。また、彼らとの会話、ダンス、歌、食事、全てがかけがえのない思い出として残っている。この点において今回の「学生交流」は成功だったと言える。



「学生交流、国際交流を通じて学んだこと」

吉川夕葉（上智大学1年）

最初に、このAAEE主催のスタディ・ツアーはアジアの学生の交流を促進することを目的に企画されたものである。すなわち今回のツアーでは参加学生が学ぶことについて、学生交流が最大の目的、また基盤となっている。本稿ではこの、学生交流、国際交流に対して感じたこと、学んだことについて述べたい。

今回ツアーに参加するにあたり、自身の目的としてネパール人学生との交流、自分自身をより良く知ること、ネパールという国を知り、感じることを意識し、特にツアーの目的でもあるネパール人学生との交流に重点を置いていた。この点において、私は以下の2つのことを学ぶことができた。

まず、第一に挙げられるのは、国際交流における人間レベルでの交流の難しさである。私は大学内の国際交流サークルに所属しており、留学生と関わる機会を日常的に持っている。約1年の活動を通じて、国籍や出身国が異なっても中身は人間皆同様であり、性格や人間性などは同じ人間として普遍性があるということを学んだ。留学生と接する中で

「留学生」や「アメリカ出身の人」などという立場に過剰な意識があったり、フィルターをかけたりすることで、自身の中で日本人の友人とは別に区分してしまい、その人自身の人間性を知る段階まで辿り着かないことが予想される。ここに、国際交流の難しさがあるのではないだろうか。実際に、活動を始めた初期の頃、留学生と、「留学生」としてしか関わっていない自分の姿勢に気づき、以来正規生も留学生も同じ人間だと考え、一人の人間として関わるように意識してきた。ネパールの学生に対してもそれは同様で、日本の学生とネパールの学生、という立ち位置ではなく、生きている環境は違うが、立場の同じ学生同士として交流し、意見交換をしたいと考えていた。出身国には固執しすぎず、議論の際の引き出しの一つとしてツール程度の意識にとどめておくようにして活動を行った。

結果として、ネパールの学生それぞれの性格や人間性を掴むことはできたと思っている。しかし、2週間彼らと関わる中で人間として接することはできたが、日本人を対象にした場合のレベルまでは達していない。意識をしてもなお、なぜ関わり方が同国出身者と他国出身者とで差が生まれるのだろうか。この理由として、第一に言語の壁、第二に根本的な前提意識が考えられる。お互い英語を勉強してきたとはいえ、交流の上で言語は大きな壁となってしまう。ましてやスピーキングが苦手と言われている日本人にとって、言語の壁は高い。意思疎通に苦労している段階で、互いの人間性を探り、その人自身を知ることは難しい。留学生と接する中でその難しさに気づき、また、今回のようにスタディ・ツアーという特殊な形で、短期間だが凝縮された濃い時間をネパール人学生と過ごすという非日常的な体験を通じてより一層日本人と外国人、という壁を感じた。自分が意識しないように意識していたため、よりその壁の存在を感じる場面が多かったように思う。そしてその日本人と外国人、という壁は、作るというより前提意識として出来上がっているものであると考えた。他国に比べ外国人と関わる機会の少ない日本は、その前提意識を持ちやすい傾向にあるだろう。その前提意識を崩すには、外国人や異文化を持つ人間との交流への慣れが重要であると考えられる。それには相当な時間と労力が必要であり、しかし前提意識を超えた交流ができて初めてフラットな議論や精神的な疎通ができる段階に進むことができるのではないだろうか。

二つ目に学んだことは、学生交流の意義についてである。近年、国の将来を担う学生同士の交流の大切さを主張する文句などを目にする機会がよくあったが、今回のツアーでまさにそれを実感した。そして、ネパール人との交流の中で、自分なりの学生交流の意義を見出すことができた。特に学生交流の大切さを実感したのは、自由時間に真面目なトピックについて議論した場面と、アクティビティーで村人へのインタビューを実施した場面だ。移動などの時間に、様々なネパール人学生に政治や児童労働問題、教育などについての話を振り個人的に議論をする機会があった。基本的にはネパール国内のことに基づいてネパール人学生の話や考えを聞き、それに対して私が質問を繰り返し、解決策にまで話を及ばせていたが、他国の学生とこのようなトピックについて語り合う経験が私にはなかったため非常に新鮮さを感じた。日本国内では、ネパールは発展途上国の例として話が上

ることが多いが、日本側の視点からネパールについて勝手に議論している問題を、ネパールに入り内側からみて、また実際に住んでいる人の視点から問題についての意見を聞くことができたのはとても興味深い体験であった。また、プログラム内容に設置されていた、村人にインタビューをするアクティビティーは、まさに学生交流がないと成立しないものであった。具体的な内容に言及すると、日本人とネパール人でグループを組み、ネパール人の通訳を頼りに村人との質疑応答を行うものである。普通、フィールドワークを行うにしても、自身で言葉を勉強するか通訳を介するかしなければ村人にインタビューすることはできないだろう。しかし、その国の学生と助け合うことにより、一人よがりになりすぎない質問をすることができるし、外国からの視点と国内からの視点両方からの質問への答えを得ることができる。このインタビューの形式は、まさに学生交流のカタチを表したものであると感じた。

これらの考察から、支援を行ったり国際的な問題について議論をしたりする上での、学生交流やその国の人とつながって行動を起こすことの大切さを学んだ。支援を行う際に、支援先の人々と支援者が直接コミュニケーションを取ることは困難である。さらに、大抵の場合支援者は国外からの視点で支援を考える。その場合、ズレが生じてしまうことが多い。その際、すでにその問題について知識がある現地の学生と協力することで、一人よがりになりすぎず、また、国外と国内の視点から一緒に解決策を考えることができる。学生交流を行う利点はここにあると考える。支援者の一人よがりになりすぎず、しかし国内では不足している力を国外から合わせることができる。支援先の人々、支援者、それを仲介するその国の学生、というバランスが支援においてとても効果的に働くのではないだろうか。

また将来国や世界を担う学生同士が交流することで、将来の協力体制が整いやすく、問題の解決につながると考えられる。解決策を模索することを目的とした純粋な議論ができるのは学生ならではのあり、国内にとどまらない世界規模での交流から、全く新しい視点に気づきそこからの意見を得ることができる。そして学生の時を得たそのつながりが、将来国や世界を担う立場になった時に活かされることが期待できる。以上の考察が、私なりに見出した学生交流の意義である。この意義が根本にあることで、様々な学生交流が形作られていくのではないだろうか。そして国際的な学生交流の場がより増えていくことで、将来的には世界規模でのつながり方も変化していき、問題解決においても今までとは異なった世界の進み方になっていくのではないだろうか。



「百聞は一見にしかず」

吉田莉乃（啓明学園高校3年）

学生交流とはただ現地の学生たちとコミュニケーションをとることではない。私は今回このスタディ・ツアーと一緒に参加してくれたネパールメンバーがいたことで、日本人だけでは決して味わうことのできなかつた経験をする事ができた。

例えば、ノワコットで行ったヤギ小屋プロジェクトのオーナーへのインタビュー。ネパールメンバーは、ネパール語しか通じない村の人々の心の内を私たち日本人メンバーのために解釈を交えながら丁寧に通訳してくれた。特に私はこのインタビューを通して、支援村の人々がどのような思いでこのプロジェクトに携わっているのか、そして国の発展にどう寄与していきたいのかという胸の内まで知ることができた。この経験は、国際協力に関心を抱いていた私にとってとても有意義なものであった。現地の人の声なしではニーズに応えた支援はできないのだと最も大切なことに気付かされたのだ。

このインタビュー以外でも、ネパールメンバーは国内の社会問題（特に出稼ぎについて）について、私の質問に熱心に答え、教えてくれた。その内容はとても多岐に渡るが、少なくとも、私がプログラムに参加する前に日本でネットや授業で学んだ内容よりもかなりリアルなものであった。「百聞は一見にしかず」という言葉の意味を痛感した。

また、ネパールのメンバーはしっかり勉強を重ねた大変優秀な学生たちばかり。私の質問についてすべて完璧に答えてくれた。私が、来日した外国人の学生に日本の問題について、これほど細かく説明できる自信はない。その意味で私はこれから自国の問題についてもしっかりと学ばなければいけないとも思わされた。

もちろん、まじめなことだけでなく、ネパールの人気曲「レッサムフィリリ」の歌詞を覚えたいといえれば必死に教えてくれたり、発音が違ったら大爆笑されたり、UNOを飽きることなく熱中してやったりと2週間でこれほど仲良くなれるとは正直思っていなかった。

渡航前は異文化体験ということに抵抗を感じていたが、考え方やノリの違いはあるものの、現地の同世代の学生たちと同視点で交流できた点では決して「異文化」ではなかったのではないかと感じた。

学生はこれからの世界を担っていかなければならない。国際的な学生交流イベントにおいては、ただコミュニケーションをとって仲良くなるというだけにとどまらず、地球上で起こっている諸問題についてお互いに議論し、その解決のために議論することが大切だ。コミュニケーションや交流を通じて、自国内、自文化内での視点のみでは見えてこない新しい視点を互いに与えあうこと。それが国際・学生交流のあるべきカタチなのではないだろうか。



英語学習へのモチベーションが俄然上がった旅

米原槇子（上智大学1年）

「交流」をどのように定義するかにもよりますが、私はここで自分の思うような交流ができなくて、辛く悔しい思いをした体験を綴りたいと思います。

その体験の原因となったのは、いわゆる言葉の壁でした。私は、今回のツアーに対して本当に期待と気合で溢れていて、ネパールに着くまでは「言葉なんて関係ないし！英語ができなくたって笑顔でいけばなんとかなるだろう」と現地での英語での交流に関してはほとんど心配をしていませんでした。しかし、それは非常に甘い考えだったなと今は思います。いざ現地に着いて学生との生活が始まると、そこには（上智大学生としては非常に恥ずかしいことではありますが）、日常会話すら成り立たせることに苦労している自分がいました。自分で話をもちかけても相手の答えが理解できないから会話が続き、どうすることもできなくなってしまった状況のなかでは、持ち前の明るさも発揮できずに黙っている場面が多くありました。自分の想像していた関わり方ができず、これで交流になっているのかと本当に悩み、意思疎通ができず自分を表現できない辛さを感じたのと同時に、自分の英語力の低さに失望しました。

また、会話が思うようにできないというこの単純な辛さ以上に大きかったのが、現地の学生たちと学問的な話だったり、各々が勉強していることや興味のあることについてだったりの深い話ができなかったことへの悔しさでした。たしかに、「心を通わせる」ことは、言葉がなくとも可能だと思いますし、それは非常に大切なことだと思います。（またはそれが「交流」のすべてかもしれませんが）実際、私もツアーの終盤では、慣れと彼らとともに過ごした長い時間のおかげで素が出せるようになり、またみんなの性格などが見えてくることで、少しずつ「各メンバーとの距離を確実に近づけていくことができているな」と実感できるようになりました。くだらない話ではありましたがみんなで盛り上がりすぎていた時間などは純粹にもものすごく楽しかったし、些細なことではありますが、そのようにみんなと楽しさを共有している時間が私にとってはすごく幸せでした。また、プログラムの内容の1つ1つのアクティビティーはとても充実していて、どれも貴重すぎる体験でした。

しかし、今回は私と同じように国際協力や地域開発に関心があり、自分の考えをしっかりと持ったネパールの学生たちが集まっていました。私は普段の彼らとの会話を通して、それらに分野の話題を通じて、意見を聞き刺激をもらい、自分の視野を広げることをものすごく楽しみにしていました。ですが、もちろん私の英語力ではそのようなアカデミックな話をすることは難しく、あまり深く語り合うようなことができませんでした。「ああもっと英語ができたら・・・せっかくの機会なのに・・・」と悔しくて情けなくてたまりませんでした。今回のスタディ・ツアーのような、ある程度深い内容を持つ国際交流の企画で、より多くのことを得るためには必要最低限の英語力というのは必須であることを痛感しました。

しかしこの経験のおかげで、私の英語学習へのモチベーションは俄然上がり、帰国後はいろいろな方のアドバイスなどもいただきつつ自分なりに英語の勉強を頑張っています。自分の身をもってその重要性を実感し、海外のたちともっと話せるようになりたい！と心から思うことができたから、このモチベーションを保ち続けられる自信があります。そう考えると、自分にとってはこの経験は自分にとって本当にためになったし、大きな意味をもつと思います。これからもっともっと勉強して英語力をつけて、またメンバーのみんなに会いに行く日が楽しみで仕方ありません！

「ネパール人についても日本人についても学んだスタディ・ツアー」

劉寛艶（東京経済大学大学院1年）

2016年2月、人生二回目のスタディ・ツアーを行った。日本人の学生8人、ネパール人の学生7人、ネパール震災地を訪問した。私にとっては、非常に難しかった学生交流であった。それにしても、見つけたいものが見つけた。

難しい交流の一番の原因は言語の問題だった。ネパールへ行く前に、ネパール人の学生と交流するは英語しか使えませんと知らされた。英語は日常会話でも困難な状態で行った。結局、私にとっては、ちょっと残念なツアーだ。うまく交流できなかったのは言語の問題だけではない。自分が、学生交流についての準備不足も大きい要因だと思う。日本人のメンバーたちは、それぞれの勉強する目標をもってネパールを向って行った。自分だけが、そんな目標が持ってなかった。もう一つは、心理的な準備も不足だ。ネパールに滞在した間で、自分がよく感情にはした。ずいぶん適当な性格で、いろんなルールを守られてなかった。そして、ネパール人の学生とも、日本人の学生ともきちんと交流でき上がらなかった。日本に戻してから、いろいろ反省した。

このツアーを通じて、何を感じたか？何を勉強したか？何を見つけたか？

ネパールに到着したとき、この国はまだ地震から回復していないことが直感じた。ネパールの首都のカトマンズには、住む家が持ってない人が多い。町で物乞いをしている子供も多い。建物、車、道路ボロボロして、空気もきれいではない。水不足、半日停電な首都である。電線が蜘蛛の巣みたい。自分の想像と大違い。二日目で、逃げたい気持ちが強くなって、散々落ち込んだ。ちょうどあの日、カトマンズの孤児院を訪問した。四十人の子供がいるところである。十分間ぐらいで、子供たちと仲良くなった、一緒に歌を歌ったり、踊りを踊ったりして、落ち込んでいた気持ちが癒された。何より、私を驚かせたのは子供たちの笑顔だ。物質不足の彼ら彼女らは、豊かな心が持っている。現場で見た状況で分かった。四十人の子供たちはちょっと大きい子が自分より小さい子の面倒を見てあげる、部屋の掃除、庭の片づけ、当たり前のように行動していた。親切な院長のおばあちゃんを見れ

ばわかる、心の豊の源は愛というもの。言葉は通じないあの孤児院で私がそう感じた。

そして、日本人の学生から最後まで諦めないことを勉強した。専攻問題について交流すると、言語力が足りないところが多少あると思う。しかも、都市生まれ都市育ちの日本人の若い学生たちにとって、ネパールの村で生きるだけで辛いかもしれない。彼ら彼女らは、言語の壁、環境の壁を乗り越えて自分が知りたい問題を底まで問い込んだ。そんな勉強の精神は私が持ってない。

見つけたものといえば、素晴らしい景色のほか、シンプルな民族雰囲気だ。シックレスというヒマラヤの山の下にある村で、フクロウ祭りが開催された。その祭りで、赤ちゃんから年寄りまで全員が出席したそう。伝統的な競技やゲームで、皆大笑い。簡単なもので、皆楽しんでいる。それは、心が広いか否かはわからないけれど、皆が自然なリズムで慌てずに生活しているからだろうかと思った。

今回のツアーで、自分の足りない部分を発見したこと、楽しんでいた時間、仲良くなった友達、美しい風景、大違いの文化等々。すべてがその時点でそのメンバーたちとで出来上がった——一生大切に保管してほしい思い出。一人との出会いはいつか一つのグループとの出会いになるかもしれない。その人たちと出会って、よかったとずっと思っている。

スポーツフェスティバルについてのご報告

文責：小田 碩規

このスポーツフェスティバルの目的はスポーツを通してポカラの学生たちとの交流をする目的で行われました。競技としては以下の4つを行いました。

1. チーム対抗大縄とび
2. リレー形式の二人三脚
3. サッカー
4. チーム対抗リレー

ネパールでは男女ともにサッカーの人气が特に高く、サッカーのユニフォームを着ている子どもが多かったです(余談にはなりますが、FCバルセロナのユニフォームを着ている子が多く、FCバルセロナが人気なのか、はたまた地震の際になんらかの支援があったのかもしれませんが)。

競技はスポーツフェスティバルのリーダーである小田と学校のネパール人メンバーが協力して行いました。競技の運営は順調に進み、大いに盛り上がりました。



スポーツフェスティバルの運営を通して感じたことが2点あります。まず、最初の1点目はスポーツの楽しさは言語の壁を越えて共有されるということ。日本のテレビ番組などで有名なスポーツ選手が途上国を訪れてスポーツ教室などを行うという企画のものをよく見ますが、私はスポーツの楽しさは万国共通といった考えには少々懐疑的でした。言語の壁には敵わないのではないかと感じていました。しかし、学校の生徒たちの楽しそうな顔や日本人メンバーの楽しそうな顔を見ていると、スポーツの楽しさは国境や言語の壁を取り払ってくれるものだということを実感しました。今後もこのような企画が途上国で運営されるべきだと強く感じました。

2点目は、異国の地、異国の人々の中でリーダーシップを発揮することの難しさです。言語も考え方も違う、そんな集団をまとめ上げていくことは困難を極めます。実際、私もネパール人のリーダーに頼っていました。相手の意見にしっかりと耳を傾け、何を行えばいいのかを考える、そのようなことの繰り返し異なるバックグラウンドをもつ人々の集団をまとめるコツなのではないかと感じました。この経験を次なる学びに活かしていきたいと思います。



「食文化交流企画について」

文責：米原槇子

私たちは、食文化での交流ということで、お互いの国の代表的な料理を作って食べるという企画をヌワコット村で行いました。

まず16日の夕飯の時間を使いネパールの子供たちが私たちに料理をふるまってくれました。作ってくれたのはライスプディングと呼ばれる料理で、牛乳にお米、ナッツ類、ココナッツ、砂糖をいれて煮込んだいわば牛乳粥です。「牛乳にお米に砂糖！？正直まずそう・・・」と思われる方も多いと思いますが、意外にもこれがかなり美味しかったです（笑）日本ではなかなか味わうことのできない味なのでとても良い体験でした。

そして17日の朝食の時間に、私たちは焼きおにぎりや焼き餃子を作りました。時間の関係上私たちが作り、ネパールの子供たちには食べてもらうだけのつもりでしたが、ホームステイさせていただいた村の家の人たちも学生たちもみんな日本料理にすごく興味を示してくれて、一緒に作業をして楽しみました。みんな餃子の皮でひだを作りながら餡を包んだり、おにぎりを握ったりしながら「うまくなってきた！」「これ合格かな？」とすごく盛り上がりしていました。また、一緒に作業をしながらお互いの国の食について話したり、「ネパールにも似たような食材があるよ～」と雑談を楽しんだりしたのも良い思い出

す。みんな味のほうもすごく美味しいと喜んでくれました（焼きおにぎりが特に高評価でした！）。

やはり食というのはその国に興味をもつきっかけとしてすごく大きなものであると改めて感じたし、一緒に料理する時間を通して学生たちとの距離も縮めることができたので、企画してよかったと思いました。

<料理風景>



<料理風景>



<餃子>



>

<焼きおにぎり>



<ライスプディング>



Participating members

Mr. Akinori Seki

President

Asia Association of Education and Exchange

Mr. Kshitiz Bhattarai

Program coordinator

Asia Association of Education and Exchange

Mr. Sharad Sharma

Assistant program coordinator

Asia Association of Education and Exchange

Nepalese members

Chinese members

- Srijana Poudel
- Saujanya Pokhrel
- Grishma Bhattarai
- Sonuj Giri
- Shreeya Devkota
- Bhibuti Malla
- Marbal Sunuwar

Japanese &

- Keita Ohira
- Hiroki Oda
- Daichi Yamaoka
- Sayaka Nagafuchi
- Makiko Yonehara
- Naoki Morioka
- Yuha Yoshikawa
- Rino Yoshida
- Liu Kan Yang

Introduction to Mero Sathi Project

Mero Sathi was a student exchange program organized by AAEE (Asian Association of Education and Exchange). This was a cultural exchange program between Japanese and Nepalese students. The program started from 13th February 2016 and ended on 24th February 2016. Seven Nepalese and Nine Japanese students participated in the program. The students were taken to Kathmandu, Nuwakot, Pokhara and Sikles. During those twelve days, the students visited different places which are of socio-economic and cultural importance. They studied about the village-life of Nepal, studied about existing social problems like child labor and learned about conditions of families post-earthquake. There was also cultural study of Gurung community. The program was a good combination of education and enjoyment.

Aims and Objectives

- i) To show the support of Japanese students to Nepal post-earthquake.
- ii) To study about the socio-economic and cultural life of Nepalese.
- iii) To know about the existing social problems of Nepal.
- iv) To study sustainable development projects like goat-shelter as a source of income.
- v) To study about the culture of peculiar community of Nepal.
- vi) To know about the village life.
- vii) To share and compare the political, social, economic and cultural practices of Nepal and Japan.
- viii) To promote friendship.



Expectation before the program

Prior to attending the “Mero Sathi Project”, we were rather thrilled and totally excited. We knew that we were going to get a unique opportunity of interacting with Japanese friends. As Nepal and Japan have extremely close and friendly relations, we customarily attach highest importance to Japanese and specially their sense of dedication and discipline. At the same time, we were also wondering what will be the outcome of the event in the context of the fact that Nepal is a very backward country with lots of constraints. We were a bit hesitant too as we thought it may be quite difficult for Japanese to adjust to our conditions. So, we were anxiously waiting to welcome our Japanese friends with a mixture of curiosity and expectation.

We were quite aware that Japan is also a country in Asia and we share common oriental heritage. In many aspects, we also had a feeling that both Nepal and Japan have greatly been influenced by the tenets of Buddhism. Despite such similarities, we knew that there were some obvious differences relating to society and culture. Japan is one of the most developed countries of the world and is a world leader in terms of technological innovation. So, the main problem for us was how to adjust them to the Nepalese environment. Food was another factor for us as there is a general paucity of materials that Japanese normally consume. Our main worry was how to make their stay in Nepal more comfortable and enjoyable.

Another matter of perpetual curiosity for us while awaiting the arrival of our Japanese friends was how could have Japan developed in such a short time. Though Japan lacked visible physical resources like oil and minerals, we had strong appreciation of the fact that Japan could make an optimum utilization of human resources and mastered both skills of management and technological innovation. We were very sure that we could very well adapt Japanese sense of dedication and discipline to enhance socio-economic transformation of our country.

Since the interactive program was focused on exchange of ideas on our respective culture and way of life, we were quite curious to know about the attitude of Japanese people towards life and also share our own perspective with them. As our society is still backward with various social evils and customs, we were quite keen to learn from them with a view to adapting their

perceptions to our own needs.

Since this was going to be a new thing for us, we tried to learn as much as possible from our Japanese friends. Since Nuwakot district happened to be one of the two districts covered by the project, we were very keen to learn at first hand the devastations caused by April 25, 2015 earthquake in Nuwakot, one of the worst hit districts by the powerful tremor. We were also looking forward to have the first-hand experience of the project designed to uplift the standard of living of one family under the GOAT-SHELTER project.

To conclude, the project fully lived up to our expectations and we were very happy that we were able to clear and satisfy all our curiosities and queries after the successful completion of the program.

A brief summary of the daily activities

13th February 2016

The Mero Sathi Program officially started with the Nepalese members going to the airport to receive the Japanese members. The excited Nepalese members gave the equally excited Japanese members a traditional Nepali welcome. They put the red tika (abir) and gave khaad (a kind of shawl) to the Japanese members. During the afternoon tea at the hotel, proper introduction of the members were made. There was a brief visit to the Thamel area where the Japanese members were staying. The Japanese members exchanged their currency. The Nepalese members were busy sharing information about Nepal and the Japanese members were very excited to know about it. Friendship was building at every moment. However, as the Nepalese members were not staying at a hotel in Katmandu, they had to return back after meeting the Program Coordinator Mr. Kshitiz Bhattarai. Overall the first day was all about meeting and greeting.



14th February 2016

The main highlight of this day was visiting an NGO called CWISH and also visiting an orphanage. In the orphanage, the members learned about child domestic labor in Nepal and what organization like CWISH is doing to reduce it. The members were presented with the past and present statistics on child labor and they were also informed about various campaigns done to eliminate child labor. In the later part of the day, the members visited an orphanage where they interacted with the children there. There was singing, dancing and evening prayer.



15th February 2016

The members of Mero Sathi project visited the Swyambhunath temple (Monkey Temple). Apart from observing Katmandu from such a high altitude, they also learned about religious tolerance and culture of Nepal. The site was also damaged by Earthquake and the members made inquiries about that. Later, after shopping at the local department store, the members headed for Nuwakot. After about five hours bus ride, they reached Nuwakot at night. However, the most important highlight of the day was when Keita Ohira, a Japanese member surprised his best friend Mokey who had been staying in Nepal for the past three months. That was the ultimate friendship moment.



16th February

This was a very eventful day. After inspecting the local school damaged by the Earthquake, the members visited the Goat shelter. The Goat shelter project was funded by AAEE with the aim to promote local entrepreneurship post-earthquake. The shelter was constructed with bamboo and zinc. There were separate section for he-goats, she-goats and baby goats. The shelter was made at a higher level than the ground so that the droppings could be collected and turned into fertilizer for the crops. The goat shelter was different from any other goat shelter in the village. It was very modern, efficient and business oriented. It can be noted that such goat shelter can help the villagers in the long run as it is very much business-oriented. The members interacted with the owner of the goat shelter. After that the members were divided into groups and they interacted with the families who were affected by the earthquake. Later, the Nepalese members prepared Nepalese food: Kheer (Rice pudding) and Rajmaa server with Chiura (Kidney beans and beaten rice). Around the fire, they discussed about the goat shelter while cooking food at the same time.



17th February 2016

In the morning Japanese students made traditional Japanese food Rice Balls along with the Nepalese students and taught them how to make it. Then they left Nuwakot village and began their journey towards Pokhara.



18th February 2016

From the morning, students began to prepare themselves for the ride to Sikles which was off-road drive approximately of four hours. During the ride no one had a comfortable time but everyone was curious as they knew that something special was waiting for them. After getting to Sikles all the members got to know about the village and the different community of people living there.



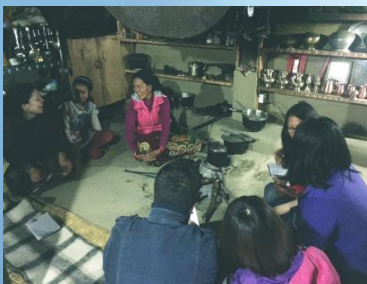
19th February 2016

In the morning there was a short hike to the top of a hill to see the scenic beauty of Sikles where the members of the Mero Sathi took photographs and enjoyed the panoramic view of the mountains and hills. In the afternoon the student members attended Owl festival organized by the local people of Sikles which had been organized in Sikles for the first time. There the student members knew about the importance of conservation of owl and nature. Different competitions such as Bird watching, Thelo (stone throwing), Ghur ghumai (top spinning), Jhijhili(a traditional game which is about to be extinct), art competition based on owls and many more contest were held where participation of the locals was huge. Student members also participated in the festival and showed their dance which was highly appreciated by the audience.



20th February 2016

In the morning the student members interacted with the Gurung community of Sikles to learn about their culture, tradition and their living style and history of Sikles. After the interaction with the people of Sikles all the members left Sikles via the same road that they had used earlier to get there. The travel was same as before. All the students were very relaxed as they could live their city life again when they arrived in Pokhara. In the afternoon student members roamed around the city and in the evening there was dinner along with live music which everyone enjoyed.



21st February 2016

The program started with sports activities in Gyanodaya Boarding School (SHAMROCK). The member of Mero Sathi organized different types of sports for the student and all the members. They were divided into four groups and played four games like football, relay race etc. In the later part of the day, members were given leisure time for shopping, wandering around or resting as their wish. At the end of the day the member went to SHAMROCK and distribute prize to winning groups.



22nd February 2016

The members of Mero Sathi visited Sarangkot early morning to see the sunrise. After having breakfast the members travelled back to Kathmandu by bus.

23rd February 2016

It was the 2nd last day of program. After having breakfast the member visited at Radio Kantipur for interview about Mero Sathi program. All the Nepalese members and three Japanese members were interviewed. At the day time, short discussion was made about the whole program. During afternoon, the Japanese members bought souvenirs from the local market of Thamel. After having last dinner there was certificate distribution program as well as thank you speeches.



24th February 2016

It was the last day of program. All the members were emotional that day. At the early morning the member enjoyed the last breakfast with each other. At the breakfast the Japanese members gave gifts to all the Nepalese member. After having breakfast all the members went to airport to say good bye to Japanese member. The Mero Sathi project of February officially ended with tears and goodbyes.



What did we learn from the exchange program?

"Mero Sathi" cultural exchange program was beneficial to students at various levels. It did not only help the students to get knowledge about one another's country's major aspects but also it helped us learn different things on a personal level; which with no doubt will help us grow into a civilized and a better human being. We Nepalese students learned that how prioritizing to appreciate every little thing in life helps maintain healthy environment around us. Similarly, it is the way Japanese students interacted with one another and us; helped us realize that the energy we Nepalese people have, if utilized in a different way, can help us achieve progress and development (May it be in any sector of life). Meanwhile, the respect that Japanese students show towards time is something that we learned and wish to follow for the rest of our lives. Their punctuality is a message that the one, who respects time, is the one who succeeds (Japan being an example of success). This principle is important to everyone but mostly to the students as we are the one who are willing to work for the betterment of present and future. Also, being able to visit rural places of Nepal (Nuwakot and Sikles) helped us learn about geographical, political, educational, lifestyle, sanitation related issues of those places. It helped us in increasing knowledge about our own country and has surely helped in our studies as well. Along with this, we also acquired knowledge about another country (Japan) and people there. As a student this program was very beneficial for us, as it helped us realize our potential and capabilities to bring positive changes. But first, it helped us see the changes that we need to bring in ourselves to become a better person.

This student's exchange program not only gave an opportunity for students to share and exchange one another's culture but also gave a room to explore various communities of Nepal. The students from Nepal as well as Japan got to explore the communities which they were not familiar of and which hadn't travelled before. Community visits brought the students more close to the social, cultural and economic life of common Nepalese. They got to visit two communities; Nuwakot inhabited by the Brahmin community and Sikles inhabited by the Gurung Community. The student members got an opportunity to learn about their hardships and struggles. Similarly, a common question that was in the mouth of Japanese student member that

was, “How do Nepalese afford to smile even in the worst situations of their lives?” was answered during their visit to the community. The interaction would also not have been possible if the community members hadn’t cooperated with the student members.

The community visits also helped the student members to broaden their knowledge regarding caste and ethnic groups in Nepal, their culture and simultaneously their way of life. In a nutshell, we can say that the activities done in the community have contributed to understand the community people, their problem, their way of lives, and their attitude towards life for vividly.

The whole program wouldn’t have been possible without collaboration and cooperation from the student members, coordinators, community members and all the people who have been part of the project, starting from driver to the RJ. Nepalese students were inquisitive about the behavior of Japanese, their taste and way of life. We were also worried if we couldn’t reflect our culture properly in front of Japanese in the cultural festival in Sikles. Nevertheless as the saying goes, “Nothing is Impossible”, Nepalese members tried their level best to reflect the Nepali culture through dance and singing. Similarly, when we went for community visits, we were also worried if we could get factual answers from the people and also if they would share their stories with us. Fortunately, with open heart they willingly shared their stories to us and also the Japanese and Nepalese student members put forwarded the interviewee with many interesting questions. Nepalese students also acted like a translator to Japanese students so that their queries could be answered by the household members. This way the interaction between the Japanese and Nepalese student member also improved for better.

Talking about the benefits of “Mero Sathi project- 2016”, the experience was wonderful. Some important lessons learnt from the Japanese group were to be punctual, be polite and be sober. Such programs have made it possible to experience and learn new culture even without leaving one’s homeland. So it’s been a great opportunity for Nepali student members



to know about Japan, its people and culture without even leaving Nepal. Such participation is indeed necessary to broaden the knowledge and perspective about other foreign countries, make new friends from different parts of the world and live each other's lives. So as a whole this program will benefit us in a long run.

Conclusion and Recommendation

For many of us, student exchange programs like Mero Sathi exchange Program is a new concept. So many of us were anxious before starting the Program but now everyone is happy to be a part of it. We had the times of our lives during the Program. From learning so many new things about Nepal and Japan to making new friends, our objective for being a part of the Program is fulfilled. We thank AAEE and everyone involved make making our journey so amazing and memorable. Programs like this should be conducted time and again. Thank you everyone!

Well the whole program was excellent but nothing is picture perfect. May be there were something missing that would make this exchange program more perfect. The program was held in Nepal and there were many travelling to different parts of Nepal. Nepalese members got to know little about Japan, so it would have been better if there was enough sharing from Japanese members too. If there was enough sharing from Japanese members then Nepalese members can also compare the things that of Nepal and Japan. And next thing as it was a culture exchange program, it would have been better if Nepalese members performed in Japanese song and the Japanese members in Nepali song. It would further help in sharing each other's culture. For next time, it would be really great if the information about such project would spread to a wider range of students, especially in Nepal. Our ultimate hope is that one day the Mero Sathi exchange Program would be held in Japan.

Thank You Everyone!

